
ドラゴンレジェンド

繩雄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

デラゴンレジンド

【Zコード】

Z8177D

【作者名】

繩雄

【あらすじ】

き力をもつ少年綺羅。高校生として平凡な生活を過ごしていた彼は、ある出会いをきっかけに非凡な生活を送ることとなる。現実と異世界の行き来。その中で明らかになつて行く龍の伝説。今、その伝説が幕を開ける。初めて書く小説なのでへたくそでセンスがありませんいかもしれませんが、がんばりますので読んでいただけたら非常に光栄です。誤字や脱字、筆記ミスなどありましたら遠慮なくお願いします。あと、感想なども参考にしたいのでいただければ嬉しいです m(- -) m

プロローグ

青き空、青き大地。青き力に支えられている世界。どんな生き物であろうと、青の意味を知らないものはない・・・

ここは青の世界より離れた世界。いわば現実の世界に俺は来ていた。俺が青の力を持っていることをこの世界の者は1人たりとも知らない。そんな俺は高校生として、平凡な日常を過ごしていた・・・

第一話 田常崩壊1

俺は天青 締羅。高校1年の16歳だ。髪は濃い茶色で目は青色。成績はオール4とぐく普通な生徒だ。

俺は今日もいつものように学校にいた。今は毎休み中だ。

「おい締羅、宿題やつて来たか？」

こいつは原川 達弘。クラスメートで髪は黒、目も同じだ。野球部に入っていてゲームや賭け事が好きだ。

「ああ、お前またやつてないのか？」

「まあな。いつものことだろ？」

「たまには自分でやつてこい」

「やる暇ないんだよ。部活もあるし。」

「つたくしょうがないな」

「へへ、すまねえな」

「ああ」

俺は宿題を渡した。実は次の授業が数学で、何故かよく宿題が出るのだ。

そしてときが経ち、放課後となつた。部活に入つていなかつた。いつものように帰つたとしていた。

「そんじゅ 締羅、かえりつ?」

「ん? お前部活なじうした?」

「今日は顧問が出張で休みなんだ」

「やつだつたのか。なら帰るか」

「ひつて締羅達は学校を出た。

「でな、そのゲームがすげえおもしれーんだよー。」

ゲームが好きな達弘は学校を出て以来、ずっとゲームの話ばかりしていた。

「今度お前に貸してやつてもいいじゃ?」

「いや、遠慮する。俺はゲームはあまつしなにからな

「まあやつになつて。お前にゲームの画面をつけてやつを教えてやる

る

「いいや、断る」

「やんなに嫌なら無理には言わねえんだな」

「悪い、俺はあまつゲームに馴染めやつになら

「いや、別にいいって。『氣にすんな』

「ああ」などとこつものよつて締羅達は帰っていた。

「ゴロゴロ・・・

「ん?」

「やばーーー急がねえと降りだすぞーーーそんじゃあなーーー」

「ああ」

達弘は先に帰つて行つた。気づけば空は真つ黒な雨雲に覆われ、今にも降りだしそうだつた。締羅は急いで走つた。

しばらく走つてみると、雨が一気に降りだした。

「くわーー

家までまっとう距離は無い。雨はついに激しく降りだした。

もうひと回りだ・・・とおもつた瞬間。

「ドガシャーンーーー！」

締羅の走つていた道のすぐ隣の野原に真つ青な雷が落ちたのだ。そこからは煙が立ち昇つていた。

締羅は何故かその場所が気になつたので、見に行くことにした。彼

の好奇心がある出会いのきっかけとなつたのは、彼は知るはずもなかつた・・・

第一話 日常崩壊2

締羅は雷の落ちた所についた。そこには深さ2メートルで直径3メートル程の大きな穴が開いていた。

「よほじゅうじい雷だつたんだな」

締羅は穴を覗きこんだ。

「なつ！」

彼は絶句した。そこには見事な青色の鱗。そして輝く白銀の角と鋭い爪と翼を生やした生き物がいたのだ。その正体はまさしく龍だった。龍は全身に傷を負つており、意識が無かつた。

何故龍が・・・とにかく家に入れよう。このことが世間に知られる、とんでもないことになる。

普通の人ならあわててふためくところだらう。

締羅は冷静に対処できた。なぜなら彼は青の世界で実際に龍に会つたことがあつたからだ。

締羅は穴に入り、龍を抱えようとしたが・・・

「くっ、重いな・・・」

なかなか抱えられなかつたが、なんとか龍を抱いで穴から出ることができた。

家が近くでよかつた・・・

締羅は雷が落ちた所から家が近かつたことに感謝した。彼は人気の無い道を通り、家にたどりついた。

締羅は既にずぶ濡れなっていたため、龍をリビングのソファーに寝かせると、すぐに風呂の準備をした。

一つ言つておくが俺は一人暮らしだ。両親は俺が生まれた後、何処かへ姿を消したらしい。

俺は塗れた制服などをすべて脱衣室にある洗濯機に放り込んで着替えた後、龍のところへむかった。

龍は切り傷ややけどが多少ある以外は特に怪我したところはなかつた。

「この程度の傷なら、俺の力で十分治せるな

締羅は手のひらを龍に向け、精神を集中させた。すると、締羅の手から青い優しい光が出され、龍の体を包み込んだ。すると龍の体の傷がみるみる消え、完全に全ての傷を消した。

少し経つと龍の呼吸も落ち着き、安定したよつだ。

締羅は風呂に入つついでに龍も一緒に入れ、汚れた体を洗つてやつた。

風呂から上がると、時計は6時を回つていた。締羅はソファーに龍

を寝かせると、夕食の準備に取り掛かった。

しばりくじて夕食もでき、食べようとテーブルに向かおうとしたそのとき、眠っていた龍がむくじと体を起こした。どうやら意識が戻つたようだ。

「田が覚めたか・・・」

締羅は龍に近づいた。

締羅に気づいた龍は締羅に向かって翼を広げ、こちらに近づいてきた。威嚇しているのか。警戒してみようがな・・・うかつこま近づかんな。

そう思つた締羅は足を止め、両手を挙げて言った。

「俺は何も持つていない。何もしない」

だが龍はいまだに威嚇している。

締羅は少しずつ龍に近づき、手を伸ばした。

龍は締羅の手が近くまで来ると、本当は怯えていたのか、ぎゅっと田を開じた。

締羅は龍の頭に手を乗せると、優しくなでてやつた。

すると龍はゆっくりと田を開け、不思議そうにじっと締羅を見つめてきた。

「な、何もしないと言つただろ?」

この龍は人の言葉が理解できるようだ、うれしそうに一鳴きしきなり締羅に飛び付いた。

「ぐわつーお、重い・・・

いきなりの不意打ちに締羅は、なすすべもなくまともに龍ののしかつをくらつてしまふのだった。

しかし・・・本当に龍がいたとは・・・青の世界でも、伝説の存在とされていたのに・・・青の世界はモンスターがいるからまだしも、その存在が全く無いこの世界に龍がいることがどうも腑に落ちない。龍に聞くにも龍の方は言葉が理解できても話せないのなら意味がない・・・

そう思つた綿羅は龍をどかせ、夕食を食べることにした。すると龍は空腹を訴えて来たので、冷蔵庫にあつた生肉やるいことにした・・・

「口に呑べばいいんだが・・・」

綿羅の心配は無用だつたようだ、龍は美味しそうに食べはじめた。

おやぢく・・・何らかの異常現象によつて空間がねじ曲げられ、たまたまそこに入ったこの龍がそれに巻き込まれ、ここに飛ばされたのだろう・・・

どうして怪我をしているのかは分からないが・・・そういえば、青の世界と対になる赤の世界に龍が居ると聞いたことがある。多分そこから来たのだろう。

などと考えている内に、龍はあつといつ間にあげた生肉を全部食べ終わつており、空腹が満たされたのか、綿羅に向かつて頭を下げた・・・感謝しているようだつた。

「腹いっぱいになつたか?」

龍は「くふんと頷き、ソファーに戻つていった。

俺も食べるか・・・

しばらくして締羅が夕食を食べ終わり、食器を洗つて龍のところに戻つてくると、龍は疲れていたのか、気持ちよさそうに眠つていた。締羅はそこにあつたバスタオルをかけようとしてふと思つた。

この龍は子供なのか？龍にしては小さにな・・・

龍は頭から尻尾までで、3メートルはあつた。締羅はバスタオルを龍にかけ、電気を消してリビングを出で、自分の部屋に向かつた。自分の部屋に入った締羅は、すぐに寝ることにした。

今日はなんだか疲れたな・・・これからあのを龍どつすればいいんだ。当然家に置いておくが、いつまでもつか・・・

そつ考えている内に、締羅は眠りに落ちていた・・・

「ん・・・朝か・・・」締羅は時計を見た。

「9時か。今日は土曜だつたな・・・

締羅は横を向いた。

「ん？これは・・・まさか！？」

嫌な予感がした締羅が向いた方には龍の尻尾のようなものがあつた。締羅は起きようとしたができなかつた。

なんだ、この抱きつかれているような感覚は・・・

「はつ！」

締羅ははつとなり布団をばぐと、そこには締羅の体にしがみついて寝ている龍の姿があった。

締羅は思わず声を上げた。

なんで俺のベッドに龍が居るんだ！？

龍は完全に安心しきつて眠つている。

昨日余ったばかりなのですが、よくいいがまでもできるな・・・

締羅は龍を起さないよつと龍の腕をどかし、ベッドから這い出るベッドを見た。今度は龍は枕にしがみついて寝ていた。

俺はこの龍に気に入られたのか・・・?

締羅は溜め息を付くと、部屋を後にして服を着替えて朝食を取ることにした。

今日は作る気にならないな・・・あれを飲もう。

締羅は手をひらき、集中する。すると締羅の手が光つたと思つとそこには栄養ドリンクのような物があった。締羅はそれを一気に飲んだ。

これは一日に必要なエネルギーを全て取れる栄養薬だ。もつこれで今日はなにも食べなくても大丈夫だ。

締羅が部屋に戻ろうとすると、龍が眠たそうな顔をしてリビングに入ってきた。

「ぐつすり眠れたか？」

龍は嬉しそうに頷いた。

「わい、暇だし宿題やつとくか」

締羅は龍に食事を「」えた後、宿題をすることにした。

「・・・」

じー

「・・・・・」

じー

「・・・・・・・」

じー

あ、もうなんなんだ！！それから俺のことがかり見てーまるで集中出来ないじゃないか！

実はさつきから龍は、宿題をしてくる締羅をずっと見つめっぱなしなのだ。

もうここ、また後でやろう。

俺が龍の方を向くと、龍と目が合った。すると龍は上目遣いで俺を見つめてきた。じつぢつと見つめながら俺を見つめていた。

遊んでやるか。と思った瞬間。家のチャイムがなったのだ

ピンポン。。。

締羅はその場に凍りついた。。。

ピンポン・・・

「締羅ー、遊ばせり?」

なんと来ていたのは達弘だった。

「・・・・・・・

まあこ・・・今達弘を家に入れたりとんでない」とになる・・・

「おこ、締羅ー。いるのかー?」

「ここか?」おとなしくしてゐるんだが

俺は籠にコベングで待つてゐるよつて言つた。籠は少々頷いた。

「こまゆる

締羅は玄関のドアを開けた。

「よつ締羅。遊ばないか?」

「こや、今日は家でゆっくりしたいから遊ばない

当然俺は断つた。簡単な言訳を語つて。

「じゃあお前の家で遊ぼうぜ？それだったらお前が家から出ぬ！」
なく遊べるじゃないか」

「いや、今日はどうしても一人でいたいんだ。だから、すまん

「わかった。じゃあ明日はいいだる？」

「どうかな？」

「あ？ なんだよそれ

「そのときの気分で考える。だから分からないな」

「わかつた遊べる」ことを祈つてゐるぜ」

そう言つて達弘は帰つて行つた。

俺は祈つても無いがな・・・

締羅は明日は達弘が来ないとおつとましく待つていた。

「すまん、ありがとな」

龍は締羅の言われたとおりにおとなしく待つていた。

「散歩にでも連れて行つてやれたいんだがな。無理があるよな。」

しかしこのままでは龍がかわいそうだ。ずっと家のなかに入れてくれにものいかないし、龍も嫌になるに違いない。

「はあ、人間の姿にでも変わってくれれば、」こんなこと思ふずにすむのにな」

そんな「」をほやこてこると、龍が締羅の肩を叩いた。

「ん？ どうした」

締羅は龍の方を向いた。龍はとても締羅に甘えたこよつて、今にも飛びついて来そうだった。

「うふ、うふとまつてくれ……」

龍はもう我慢できなとばかり思いつき、締羅に飛びついた。

「ぐわあー、離れなつてー。」

そんな締羅の言葉を龍は無視して、今度は嬉しそうに締羅の顔を舐めはじめた。

「や、やめなさいー、くすぐったいからやめてくれー、それに重い……」

「

締羅はなんとか龍を押しのけると、ぐつたりとソファーに座った。そして龍のよだれまみれになつた顔を拭いた。

はあ、全く何でそんなに俺になつてるんだ？

俺は溜め息を付いた……

「」のままだと、俺がもたないな……」

締羅は部屋に戻つて宿題のつづきをすることにした。当然、龍も付いてきたが。

「よし、これで全部終わりだな。龍の視線が気になつたが」

締羅は龍の視線を受けながらも、宿題を終わらせた。

「もう昼になるのか。俺は何も食べなくていいが、龍に何かあげないとな」龍に食事をやるとあつたいう間に食べ終わり、ソファー昼寝をはじめた。

俺も久しぶりに昼寝するか・・・

締羅は龍の隣に座つた。すると龍が締羅の膝に頭を預けてきた。締羅はその頭をしばらく撫でてやつた後、眠りに落ちた。締羅が目を覚ますと、時計はもう5時を差していた。

「ん・・・もうこんな時間なのか

しかしかなり眠つていたようだな・・・久しぶりだったからな。こうやつて昼寝をしたのは、3月にしては、今日は暖かかったな。

買い物に行かないと・・・

「いいか? 家でちやんと留守番してるんだぞ?」

龍は置いて行かないでと言わんばかりに激しく首を横に振つた。

「じゅあいへじゅあ まじでじゅだ。」帰った後、たくさん遊んでやるからな。それでじゅだ。

あつやうと龍は嬉しそうに頷いた。

「すぐに帰つて来るからな」

そして家を出た締羅は急いで店まで行き、やつをと必要な物を買つてすぐに家に向かつた。

はあ・・・何故かあの龍からば田を離せないんだよな。ちやんと俺の言つとおりにじまじしてくれてるんだが・・・何か不安で仕方がないんだよな。

そんなことを考えながら締羅は家へつゝと、ふと立ち止まつた。

何か嫌な予感がする・・・まあ氣のせいだろ？

そう判断した俺が甘かった。ドアを開けると、龍が飛びかかってきた。当然俺はそのまま張り倒された。早く遊んでほしいみたいだ。

「ま、まて。荷物を置いてからな。」

それから俺は龍に夕食をやつて遊んでやつた。そのときの龍はとても幸せせんと見えた。

「わい、わんそろ風呂に入るか・・・」

時計は9時を差していた。

締羅は風呂場に向かっていようとふとあることに気づいた。龍が後ろからついてきているのだ。「もしかして、一緒に入りたいのか？」

締羅の言葉に龍は何度も頷いた。よほど一緒に入りたいようだ。

「しかたないな、一緒に入つてやる」

しかたなく締羅は龍も一緒に入れることにした。

・・・龍と風呂だなんて、妙な気分だ。

締羅は今、龍とともにに入浴中なのだが、妙な違和感を感じていた。

まあこいつの悪くはないか・・・

風呂から上がった締羅は、すぐに寝ることにした。が、また龍がついて来ているのだ。

「ま、まさか俺と寝るつもりか？」

龍は当然とばかりに頷いた。

「までもこいつは俺と一緒に居たいんだ？」

締羅はもつ断つても無駄だと思い、龍と寝ることにした。何故か締羅は龍が居るところに、あつたり眠りこつべことができた。

そして、締羅がこの龍が人間に姿を変えたりさえできればという願いが、後にかなうこととなる・・・

現在、日曜の朝4時頃。締羅はふと田を覚ますと、トイレに行こうと起き上がった。ところが思いがけないようなことがあった

「な、なんだと……。」

なんと締羅の横には龍の姿は無く、かわりに少女が眠っていたのだ。しかも締羅の腕にしがみついて。

その少女は、膝あたり程までもある龍の鱗とそっくりの色の青い髪、翼のようことがつた耳。年齢は13、14ぐらいだ。寝ているので田の色は分からぬが、整つた顔をしていた。そして、ふさふさの鱗と同じ色の毛に覆われた尻尾があつた。美少女と言えた。いや、可愛いにも当てはまるだろう。

可愛い子だな。でも、俺は絶対に女の子なんて家には入れてないぞ！ちゃんと鍵も掛けたし、入つて来れるはずが無い！…そういえば、龍の姿が見あたらないな……。

俺はまだ変な夢を見ているんだ。次に田を覚ましたときには、もうこの子もいない……。

締羅はそう考え再び眠りについた。どちらが彼は、このことを夢だと思ふに込んでいるようだ。

そして朝9時を過ぎた頃、締羅は田を覚ました。が、横を向くと、4時頃に見た時と同じ後景があつた少女が寝ているのだ。「ゆ……。

夢じゃ……なかつたのか……

締羅は畳然としたが、落ち着いて考へたためベッドから出ることにした。ちゅうじゅう今、少女が離れてこるので出るには絶好のチャンスだった。締羅はベッドから出ると、部屋を出でビビングに向かつた。

「なぜだ……どうなつてこるんだ……」

締羅は先ほどからソファーに座り、考へこんでいた。

「なんで女の子が……しかも俺のベッド。俺は昨日龍と寝たはず……やういえば、龍は何処いった?」

締羅は家中探したが、龍の姿は見つからなかつた。

「あの子に聞いてみるか……何か知つてゐるかもしけない」締羅はふと部屋の前で止まつた。

なんか入りづらいな……

女の子が部屋の中で寝てゐるので、締羅は口をついた。

「いや俺の部屋なんだ部屋の主が入れないでどうある。

締羅はドアをあけ、部屋に入った。少女はまだベッドで寝てゐた。締羅は少女に近づいた。

「おこ、起きて。起きてくれ

起きる様子が無かったので締羅は少女の体をゆすった。

「頼む、起きてくれ」

「うう～ん」

少女は目を開けた。やっと起きたようだ。そのまま締羅と同じ透き通った青色だった。

「ふにゅ？ 朝？」

少女は可愛らしく声を出して起き上がった。

「やっと起きたんだな。で、こきなりだが何で俺のベッドにこもるんだ？」

「え？ 私は昨日主人様と一緒に寝ましたが・・・

「はあ？」

「主人様？ いつたい何を言つてこらんんだ？ この子は・・・

「なあ、ここに龍はいなかつたか？ 信じるわけないが、いたんだ」

「龍ですか？」

「ああ、やつだ。見てないか？」

「えっと、あの、その龍つてこの姿ではあつませんか？」

少女はそういうと田をつぶつた。すると、青い光に包まれた。

「この光は……青の光……

光が消えると、そこには見覚えのある龍の姿があった。

「ま……まさか……君は青の世界で伝説と言われている龍人なのか？」

「はい、そうです」

「ふつ、まさか実在するとはな……」これは驚きだな……」

「私達は伝説とされているんですか？」

「ああ。絶滅したとも言われているし、存在しないとも言われた存在だ」

「『』主人様は私のことを疑つていらっしゃいますか？」

「いや、眞実を見たからには、信じるしかないしな」

「あの、『』主人様は私を殺そつとは思つていらっしゃらないですよね？」

「当然だ。殺すなんてことはしない。それよりなんで『』主人様なんだ？」

「はい、それはご主人様が怪我を負つていてた私を助けてください、それに優しく接してくださつたり、食べ物も下さいました。こんな人に、私は会つたことがありませんでした。だから私は、ご主人様が主であつてほしいと思い、そう呼んでいるんです」

「そうなのか。そのご主人様というのはなんとかならないのか？」

「いいえ。私はそう呼ぶと決めましたので、ずっとそうご主人様のことを呼んでいくつもりです」

「そ、そうか。それでいつまでここにいるんだ？」

「ずっとですよ、ご主人様。ずっと一緒にいます。これからも、よろしくお願ひします」

「え？・・・あ・・・はあ、これからどうなるんだ・・・」

この瞬間、締羅の平凡な日常は崩れ去つたのであつた・・・

第六話 学校の騒動①

次の日の月曜の朝

「ん・・・・もう朝か・・・・」

締羅は起き上がり、背伸びしてリビングに向かった。

「そういや、あの子の名前聞いてなかつたな。あとで聞くか

少女はまだ寝ている。当然締羅のベッドで。

「寝所つくつてやらないとな・・・」

締羅は朝食をつくつ、食べ終わる頃に少女が起きてきた。

「あ、おはよございます」

「ああ、おはよう。朝食そこにあるからな」

「はい、わざわざすみません」主人様

「気にするな。それより主人様はどうにかならないか?」

「では締羅様ではダメですか?」

「このほうがましだらう。少なくとも主人様よりは。

「ああ、それでいい。ん? なんで俺の名前を?」

「「」の前誰かが来たときに締羅様の名前を言つていたよいつなので、それで・・・」

「ああ、達弘が来たんだつたな。ところで君の名前は?」

「私はティオといいます」

「よひしくな、ティオ」

「はい、締羅様」

「じゃあ行つてくる」

「え? 何処へですか?」

「学校だ。当然だろ?」

「学校・・・ですか?」

「そうか、ティオは学校を知らないんだな。

「まあ今度教えてやる。留守番頼んだぞ」

「わ、私も行きます!」

「だ、だめだだめだー!」にこにこ

「うー」

「いいか、ついて来たりするんじゃないぞ？」

「……うー」

「わかつたな？じゃあ行つてくる」

締羅はうつして家を出た。

とんでもない、ティオを学校なんかに連れて行つたらまずいことに
なる。しかも尻尾生えてるし。連れて行けるわけないじゃないか。

「よひ、締羅。おはよー」

「ああ、おはよー」

「今日はいい天氣だな。なんかこんな天氣は久しぶりな気がするな

「やうだな」

そういうえばこんな晴天は久しぶりだつた。いいのいいの雨が何日も
続いていたのだから。

「あ、締羅君おはよー」

「ああ」

教室に入った途端声を掛けられた。彼女は花宮 鈴華（はなみや りんか）。中学校から一緒に。

「ここは安らげるばしょだな・・・

締羅はふとそう思った。無理もない。家にはこの世界ではありえない存在があるからだ。

今日の最初の授業は社会だった。いつも通り授業を受けていたが、なぜか締羅は妙な胸騒ぎを感じていた。

なにかましいことが起こりそうな気がする・・・気のせいだ。何も起こりはしない・・・

そつ思いながら窓の外を眺めていると、大きな影が横切っていくのが見えたが、よくとらえられなかつた。

ん・・・?

締羅はこのとき嫌な予感がした。その予感は当たることとなる・・・

・

第七話 学校の騒動 2

その影の正体はなんとティオだったのだ。無論、龍の姿だが。

ここに締羅様がいるはず・・・

ティオは学校の屋上に降りると人間の姿になり、校内に入った。

締羅様、何処にいるんでしょう・・・

学校に入ったのはいいが、締羅の居場所が分からなかつたのだ。ちなみに締羅は1年B組で、一学年A～Dまでクラスがある。

だがティオは偶然今、1年の廊下を彷徨つているのだ。

そして休み時間に入った。締羅はトイレに行こうと教室を出た瞬間だつた。

「なつ・・・・！」

「あ、締羅様！」

なんと締羅はばつたりとティオと会つたのだ。

な、何故ここに・・・幻覚を見るのか？俺は・・・

「な、何故ここに・・・」

「だつて締羅様とどうしても一緒にいたくて・・・」

「そ・・・・ そなのか・・・・」

「会ったかったです！」

するとティオがいきなり締羅に抱きついたのだ。

「お、 おい・・・・」

ぐ・・・ なんだ、 ここの突き刺さるような視線は・・・・

締羅は今注目の的になっていた。

ヒ・・・・ とりあえず場所を移すか・・・・

締羅はティオを抱き上げ、 教室を飛び出そうとしたが・・・・

「誰なんだ？ その子」

達弘が顔を真っ赤にして聞いてきた。

「そ・・・・ そ、 ここの子は・・・・」

「締羅様は私のこ主人様です」

「なつー！ ティ、 ティオー！」

「て・・・・ 締羅・・・・ そなのか？」

「こ、 ここの子は親戚の子供で、 ここの両親が仕事で海外へ行つたか

ら、家で預かつてゐるんだ」

「締羅は一人暮らしだろ？ だつたらその子と一ときりで生活してゐるのか？」

鼻息を荒らしながら聞いてきた。

「そ、そ、う、だ、が、」

「——總——總——」

二二二

すると達弘がいきなり締羅に掴みかかった。

「あの二階へ綿羅一こんな可愛こ女の子と一緒に生活してゐるとは

「そ、そいつ言われても……」

締羅が気づくと、教室やその周囲に、締羅のクラス以外の生徒も集まっていたのだ。

この状況、酷くまずいな。とにかくここを脱出しなければ・・・

締羅はティオを抱きかかえると生徒を押しのけ、教室を出ると一気に駆け出した。

後ろからは生徒達が追つて来ていた。

締羅は屋上に出ると、ティオを下ろした。

「いいか、何があつてもここには来るんじゃない。すぐに帰るから。いいな？」

「でも……」

「時間がない……大丈夫。必ず帰るから」

「スマリアゲート」

そう言うと締羅は手に神経を集中させた。するとティオが青い光に包まれたかと思うと、次の瞬間姿を消していた。締羅は転送の術を使い、ティオを家まで送り飛ばしたのだ。

「よし、これで大丈夫だ」

そして締羅は中へと戻った。

「あ、見つけたぞー！」

男子達がいつせいに駆け寄ってきた。

「あの子はどうだ？」

「家に帰した」

「な、なに……いつの間に！」

「とにかく、教室に戻るぞ」

「うして締羅達は教室へ戻った。その後締羅は普通通り授業を受けたのだが、周りの生徒達は締羅のことばかり見ていた。しかもすさまじく痛い視線で。締羅は男子の視線より、女子の視線のほうがより多く痛く感じた。

なんか全然集中できなかつたな今日は。ひとつと帰るか。

「締羅君ー。」

教室を出ようとした締羅はいきなり呼び止められた。

「ん?なんだ」

「あの・・・その・・・」

「?」

声を掛けてきたのはあまり話したことのない女子だった。

「その・・・締羅君はあの子と同じく関係なの?」

「ティオは俺の親戚のよひなものだ」

「そ、そつの・・・わかったわ。ありがと」

「ああ」

そして締羅は学校を出た

まさか学校でこの力を使うとはな・・・すべてティオが原因だが。まさか学校について来るとは思つてもなかつたな。おかげで嫌な目線で見られたし・・・

締羅は家につき、ドアをあけた。その瞬間。

「締羅様ー！」

「ぐわつー。」

ティオがいきなり飛びついてきたのだ。

「よかつたです。帰つてきてくれて」

「必ず帰るつて言つたろ？」

「はい。うれしいです」

「とりあえずどういかな」

締羅はティオをどかせると着替え、夕食の準備に移つた。

「今日はなんですか？」

「今日はカレーだ。知つてるか？」

「つーん分からないです」

「まあ後で教えるから」

一つ言つておくが、俺が料理を作つているわけではない。この世界に住み始める2ヶ月程前、締羅の出したこの世界に来るための異次元空間が誤作動を起こし、2500年に締羅を飛ばしてしまったのだ。そこで締羅は食べ物を自在に作れる装置を手に入れ、そのまま持ち帰り、この世界に持つてきたのだ。この装置は水さえあればなんでも食べ物の製造が可能だ。

夕食を終えた俺はソファーにばつたりと倒れこんだ。その隣にティオが座つた。

「はあ、何か大変な一日だつたな」

「学校つて人がたくさんいましたね」

「まあな

」

「なあ
　　はい？」

「ティオはまた龍の姿に戻れるんだろう？」

「はい、そうですが

「じゃあ龍の姿でいてくれないか？」

「どうしてですか？」

「そのほうが何故か落ち着く」

「分かりました」

するとティオが青白く光り始めた。その光は人間の形から龍の形に変わると、ふつと消えた。

「こんなふうに変身するんだな」

龍の姿のティオは頷いた。

「はい」

「ん?、誰かの声が・・・」

「私ですよ。締羅様。」

「テレパシーか」

「少し違いますけど、そのようなものです。」

「ほう、なるほどな。一応俺もテレパシーの力は持ってるんだがな」

「うなんですか?」

「ああ。ほら、できるだろ?」

締羅はテレパシーを使ってみせた。

‘あの、締羅様。’

‘ん?’

‘今日も一緒に寝てもいいですか?’

‘その姿だったらがまわない’

‘え・・・あの、人の姿で寝たいんですけど・・・’

‘駄目だ、そんなことすると俺の理性がもたない’

‘え?’

‘あ、いやなんでも。とにかくその姿だったら一緒に寝てもいい’

‘う～、わかりました。’

‘ああそうだった。風呂のときもだぞ’

‘ええ?’

‘だから理性がもたない。だから頼む・・・’

‘はい～’

‘まあたまには人間の姿でも寝ていいから、そう気を落とすな’

‘あ、ありがとうございます’

「ち、早く風呂に入つて寝よつ」

「はい、

そういえばティオを洗つてやるというのは、女の子を洗つてやつてことになるのか？いや、龍の姿だったらなんの関係も持たないし、別にかまわないか。

そうして風呂を上がつた締羅とティオは、締羅の部屋へ向かつた。

締羅はベッドに入ると、ティオを隣に入れた。

「おやすみなさいませ、締羅様、

「ああ、おやすみ」

いつも一人？は眠りについた。

いつして学校の騒動は幕を閉じたのだった。

第八話 買い物へ

現在、俺とティオ（龍）は布団で寝ているのだが。

「締羅様、

「ん？」

「狭くないですか？」

「少し狭いが大丈夫だ。気にしなくていいぞ」

「あ、はい。ありがとうございます」

俺の寝ているベッドは元々一人用だったから一人のときは思いっきり手足を伸ばして寝れる大きさだ。

ピカツー、ゴロゴロ・・・

「ん？、降り出しそうだな。ここは所雨が続いてるな

「い、怖いです！」

「雷、怖いのか？」

「はい、これだけは苦手で・・・でも、締羅様がいるから平氣です、

ピカツー、ゴロゴロゴロ・・・

「ひやあ！」

ティオは締羅にしがみついた。

「大丈夫だ、怖くない」

「ううう」

「おやすみ、ティオ」

次の日の朝

今日は久々の晴天となっていた。

「う・・・ん・・・」

締羅は目を開けると、そこには締羅に抱きついて寝ているティオ（人）がいた。

「う、うおあー！」

全く、心臓に悪いじゃないか。はあ、学校の奴らどう思うだろうな。俺がこんな可愛い子と一緒に風呂に入ったり寝たりしていることを知つたら・・・い、いや、何を考えているんだ俺は！だが、このことを知られると間違いなくとんでもないことになるだろう・・・

「今日は晴天だな。なんか久しぶりだな」

今日は土曜で何もすることがなかつた。

「う・・・ん・・・締羅・・・様・・

ティオはどうやら俺の夢を見ているようだ。

ティオは本当に可愛いな。思わず見とれてしまつ。こんな子が俺をご主人様にしているのを学校の奴らが知つたら、殺されるだろうな。勘違いしないでほしいが、俺は襲うなんてことは一切するつもりはない・・・

「うひゅ・・・あ、おさよひひひひこます」

「あ、ああおはよつ

だあーーーなに見とれているんだ俺はー

「?、どうかしました?」

「ああ、い、いやなんでも」

「そうですか」

「それより何故巫女の服装なんだ?」

「これは私が最初に着ていた服ですから」

「やつか」

そして締羅とティオは朝食を終えると、ソファーでくつろいだ。

「暇だな・・・買い物でも行こつか?今日は祝日で学校は休みだからな」

「あのつ私も

「やうだな、いつまでも家に閉じ込めて也可哀相だからな

「え、いいんですか!?」

「ああ、でもその尻尾はなんとかならないか?あと服装も

「え、あの、私このほかに着るものは持っていないんです」

「な、なに!..」

「ここのままで歩かせるのも無理だし・・・あ、そうこねば

締羅は物置部屋へ行き、一個のダンボールを取り出した

「これは俺が中学生のときに着ていた服だ。これから着れる物を探やつ

それから数分後・・・

「ちよつと無理があつたか?」

ティオは綿羅の服着たのだが・・・

「私はこれでもかまいません」

「そ、そつか・・・なら行くか」

「はい」

そして綿羅達はデパートにやって来たのだが・・・

女の子の服つてどう選べばいいんだ・・・ティオにはどんな服が似合つんだ?

「なあ、ティオ」

「なんですか?」

「服、自分でいいの選べるか?」

「あ、はい、だいじょうぶです」

「俺、女の子の服つてどう選べばいいか分からぬからや。好きなの選んでいいから任せや。俺はそこにいるから」

「はい、分かりました」

それから数分後・・・

「おまたせしました」

「ああ、行こうか」

さて、ティオの服はやみつた。もつ帰るとこより。壁紙は無用だ。

「ああ、もう帰るわ」

「え、もうですか」

「ああ」

「」で学校の奴らなんかに見つかってみる、ややこしくなるに違いない。

「わかりました」

そして家に帰り着いた一人は昼食をとった

「締羅様」

ソファーでくつろいでいた締羅にティオは話かけた

「ん?」

「うふとお話をが・・・」

「話?」

「はい、大切な話です」

第九話 契約1

「話? 何の話だ?」

「じつは、契約についてなんですが・・・」

「契約?」

「はい、あなたと私の契約です。契約をすれば、締羅様は私の力を使うことができます」

「その力を使つて何かするのか?」

「はい、締羅様に私の力を捧げようと思ひます。助けてもらつた恩です」

「いや、俺にはもう力はあるから・・・」

「でも、これでは私の気が済まないんです。お願ひです」

「龍の力を得るといつのはどんな風なんだ?」

「わたしと締羅様がひとつとなり、龍神の力をあやつる」ことができます

「龍の力か・・・また元の姿に戻れるのか?」

「はい、もちろんです」

やつてみるか・・・

「よし、 なら契約しよう」

「ありがとうございますーーあ、 一つ言つておかなければならぬことがあります」

「何だ?」

「契約した後の私は、 今の私であつてやうで無くなります」

「どうじつ意味だ?」

「つまり、 人が変わると言つことがあります。 では、 いきますよ。 私の手を握つてください」

締羅は言われるままにティオの手を握つた。 するとティオは呪文のようなものを唱え始めた。

「一つの身と心を一つとし、 今ここに繋り結ばん!」

その瞬間締羅とティオの体がまぶしくひ光り始め、 光りの球体となり一つの光の球体が浮かび上がり、 やがて一つに合わせた。

光が消えると、 締羅の姿は変わっていた。

背中に大きな龍の翼が生え、 手には背丈以上もある巨大な剣が握られていた。 その剣は驚くほど軽く、 まるでそこらへんに落ちている木の枝を持っているような感覚だった。

体は頑丈で、しかも軽い胴防具、籠手、具足に覆われ、青黒く光っていた。

すごい・・・これが龍の力か・・・

「そろそろ元に戻りたいんだが・・・」

…分かりました、締羅様」

締羅の体が光を放ち、光が消えた頃には締羅は元の姿に戻っていた。
そして締羅の目の前に一人の少女がいた・・・

— ● ● ● ● ●

なんだこの子は？なんかティオに似てるが・・・

少女は青く光る膝程の長さの髪に、頭には紋章のようなものが刻まれた黒いリボンをつけており、目は締羅と同じ青色で黒いローブを身にまとっていた。

「君……誰？」

「……………ティオですよ」

「なにー? まさかそんなこと・・・はつ、おやか・・・」

締羅は契約する前のティオに言われたことを思い出した。

ティオがティオでなくなるといつのはこのじだつたのか……すこし大きくなつたように見えるが、15、16歳くらいだらうか？

「で、これからどうするんだ？」

「……私と締羅様は契約をしました……この契約は締羅様が死ぬまで無くなることはありません……」

「な、なにい！？」

「じゃあさつとティオは俺が死ぬまで引っ付いていとこいとか！？なんて無茶のある契約をしてくれたんだ！」

「なあ、取り消とかはできないのか？」

「……いいえ、それはできません」

「そりか……」

なんかとてもおとなしい子だな……喋り方もそりだし、前のティオとは全然違う……なんかさらに可愛くなつたといつかなんといつか……そんなことはどうでもいいが……

はあ、なんかこの子に様呼ばわりされると、もう理性が持たない気がしてならない……

「なあ、頼むから様はつけないでほしいんだが……あと敬語もやめて、普通に接してくれよ」

「……でも、それだと締羅様が……」

「俺がいいと言つてゐるんだからそれでいいだろ?」

「わかりました、でも様だけは・・・

「ああ、わかつた

「なんで様なんだ?

「あの」

「ん?」

「そろそろ寝ても・・・いい?」

締羅は時計を見た。針はまだ3時を差している。

「毎寝か?」

「うん、疲れたから・・・」

「疲れた?」

「・・・結身レザクトするといへ、体力を使つから・・・

「やうなのか」

「締羅様も・・・一緒に寝ない?」

「ええ!? それは・・・そのだな・・・」

絶対無理だ！前のティオだつたらまだしも今のティオはさすがに・・・

「私と寝るの・・・嫌？」

「そ、そんな」とはないが、その・・・まだ眠くないから

「・・・わかつた・・・でも、やっぱこって・・・」

「どうしてだ？」

「締羅様といふと落ち着くから・・・」

「せうか・・・おやすみ」

締羅はこの時、ひどく後悔していた。契約なんかするんじゃなかつたと・・・

第十話 契約2（前書き）

すみません、ネットの接続の調子が悪くて更新遅れましたm(ーー)

m

第十話 契約2

・
ティオは眠ったか……まったく、契約などしなければよかつた……
外にでもこいつか……だが傍にいてといわれているし、起こす訳
にもいかない。

その瞬間、締羅に頭痛が襲い掛かった。

「うう……！」

なんだこの頭痛は！？ん？手が光っている……まさか……そろ
そろなのか。

「やつとおさまったか……」

俺も寝よつか。

そして締羅も眠りについた……

数時間後……

「ふう、よく寝たな

時計はもう一つ時を差していた。

「あ、起きたんですね、

「ああ・・・って龍の姿か・・・いつの間に」

「ついでにわざです、

「さうか・・・って話し方変わってないか?」

「いの方がやつぱり話しゃすいです。」

「じゃあ別にそれでもいいよ」

「それより締羅様、

「ん?」

「あの・・・その・・・、

ティオは顔を赤くしていた。

「なんだ、どうした?」

龍が赤面するのははじめて見た・・・

「甘えてもいいですか?」

「え? ああ、別にいいが」

いや、までよ・・・なんか前より大きくなつているよつな・・・

ティオは4、5メートル程になつていた。

「い、いや、やつぱり・・・」

「締羅様あー！」

「なつーーー！」

もう遅かつた。締羅はティオののしかかりをまともに受けた。しかも前よりも強力なのを・・・

締羅は思い切り頭をぶつけ、そのまま気絶した。

「は・・・」

「締羅よ・・・」

「あ、あなたは青帝^{せいてい}・・・」

そこには神官の服を纏つた男がいた

「いかにも・・・しばらくだな」

「はい、青赤界終末戦以来ですね」
フレードル

「せうだな、一つ話しておへんことがある……」

「はい・・・・・」

「お前は龍とともにいるな?」

「せうですが

「その龍を守つてやるのだ。他の者にはけして渡してはならない。
お前の守るべき存在だ。」

「はい」

「とにかくお前も氣づいてこなと懇つが、それやうのよつだな」

「やつとですね。」の3年長かった氣がします「

「お前にとつてはそつだらつ・・・もつひとがんばりだ、しつかり
な。だが力を封じて1年だがな。」

「ありがとうございます」

「つむ。お前は我が青き力を継ぐ者だ。そのことを誇りに懇つ・・・
さあ行け、青き戦士よ・・・」

そして締羅の視界は真っ白になつた・・・

「う・・・」は・・・

「あ、気が付きました?」

「ああ、大丈夫だ」

「よかつたです」

「もつと加減してくれよ?」

「はい、ごめんなさい」

「わかつてくれればいい」

それにして、さつきのは偶然見た幻覚なのか?それとも夢?

と、そのとき

ぐ

「ん?」

ティオは顔を真っ赤にしていた

「あの・・・お腹すきました」

「そりだな、今夜は外に食べにいこうか

「はいーうれしいですー、

「姿はちやんと変えるんだぞ？」

「わかつてます！」

うれしそりだな。まあ、こりこりのは初めてなんだろりつな。

こりして一人はレストランへ向かった。

第十一話 危険な夜街

一人は人々で賑わう中心街へやつてきたのだが・・・

「うわあ、たくさん人がいますね」

「まあな、東京だし」

言い忘れていたが、俺は東京住みだ。

「それより、あまり引っ付くな。なんか誤解されるようだから」

突き刺さるような視線が容赦なく一人に襲い掛かる。締羅とティオはかなり目立つていた。特にティオは。ティオを見て顔を真っ赤にする男性達。中には鼻血を吹き出して倒れる者もいる。それとは逆に締羅を見て顔を赤くする女性もいた。大半が女子だが。ティオを睨み付けているのもいる。

「なんかさつきから見られてるような気がします」

「俺もだ。視線が痛い。だから少し間を空けよ」

「はい」

それからじょじょ歩いていると・・・

「あの」

「ん?」

「トイレに行きたいんですけど・・・」

「ああ、そうか。じゃあ近くに公園があつたはずだからそこの公衆便所に行こう」

「はい」

そして二人は公園の入り口についた

「俺はここで待っている。行ってこい」

「はい、すぐもどります」

「ああ」

ティオは急いでトイレへ向かった。そしてしばらくたつた。

ふつ、早く締羅様の所へいかなないと・・・

用を足したティオは急いで締羅の所に戻りつとトイレからでた瞬間

だった

「あやー?」

何かにぶつかつた。その衝撃でティオは後ろに転んだ

「ん? なんだ?」

なんとぶつかつた主は不良だつたのだ

かわいいいい！！

不良は顔を真っ赤にして飛び上がった

「おっ！ もちろんよ！」

なんたゞ・・・おおお！」

「どうして来たんだ?」「レーベン?」

後から二人の不良が現れた

おのづかへおもせんがよ

「駄目だ。お前のような可憐子がやんには滅多に会えないからな。たつぱり楽しめやしないやん。」

۱۰۷

ティオは一人の不良に押さえられ、身動きがとれない状態となつた。

「これがだべりません、せ」

その辺の公園の入り口では

「遅いな・・・腹でもこわしたか?」

締羅はトイレの方へ向かった。それで思ひもよらない後景に出会つた

「おーーー騒ぐんじゃねえー！」

押さえつけている不良に一人がティオの口を押さえゐる

「へへ・・・始めるか・・・」

不良はティオの服をつかむと、引き剥がさうと引っ張つた

「んーんぐぐ・・・んぐ」

ティオは声をあげようとしたが口を押さえられて声がだせない

「な、ティオ！なんて奴等だ」

締羅は近くに落ちていた身長ほどもある手のひらな長い木の枝を取ると、ティオに襲い掛かるとしている不良の真後ろまで一気に走りこんだ

不良はそのことにまだ気づいてなかつた

締羅は木の枝を空高く放り投げた。それは不良の真上に位置すると

こうだ。締羅もそれを追いかけるように飛び上がった。そして木の枝を空中で掴み、そのまま一回転すると、不良のいる真下へ急降下した。

バ
キイ
！

「ぐはああ！」

枝が折れる音と共に不良の叫び声があがつた。

「……なんだよ！？」

「テイオに」れ以上手を出すと許さないぞ！」

「おはよう」

不良達は締羅を取り囲んだ

「俺の邪魔をしたことを後悔するかい？！うらやましい！」

不良運は一斉に縁羅に向かって走りだした

先にかかつてきた不良の攻撃をひらりとかわし、蹴りを入れる。

「アガルベニ...」

蹴られた不良は5メートル以上は吹き飛ばされていた

「へ、ここ・・・克之を一撃で・・・」

克之^{かつゆき}とはおそらく今吹き飛ばしたリーダーのようだ

「いりなりややけだーくらえーーー」

残りの2人の不良が同時にかかつてきた

締羅はそれをかわし、先ほど真つ二つに折れた2本の枝を拾つた

「そんなもんつかつたつていみねーよー」

「あるや」

締羅はかかつてくる2人に向かつて斬りかかつた。その速さは人間ではどうえられない程だった。

ドオン！

大きな音がしたと思ったときには一人の体は中に浮いていた。そしてそのまま吹き飛んでいった

「まだやるか？」

「へへ、おぼえてるよーおーーすらかるだーー」

「あ、までよーーー」

そして不良達はどこかへ退散していった

「ティオ、無事だったか？何かされてないか？」

「はい、大丈夫です」

「無事でなによりだ」

「ありがとうござります。おかげで助かりました」

「ああ、いや、ティオが無事で安心したよ。で、行こうか」

「はい！」

「ついで一人は公園を出た。

あまりティオを一人にしないほうがいいな。今回のようなことはごめんだ。俺がしっかり守らないとな。

そんなことを考えていると、ティオが締縄の腕にすがりついてきた。

「ん？どうかしたのか」

「さつきみたいなことがあったから、怖くなつて」

「ああ、やうか。はぐれるなよ

「はい」

「何が食べたい？」

「やうですね・・・おいしく焼けた肉がいいです」

肉か。さすがは龍だけのことはある。肉好きなんだな・・・

「焼肉か、向こう側にちゅうじ見える。そこにして」

店について食事をはじめたのだが

「締羅様」

「ん？」

「」の辺りには龍の姿が見当たらないんですが

「ああ、」はお前の住んでる世界と違うからな

「へえ、そなんですか」

「ああ、まあ詳しくは帰つて話やう」

「わかりました」

しばらくして食事も住んだ一人は会計を済ませ、店を出ようとしました
その瞬間だった。

「お、綿羅じやなこか・・・つてかの子はもしかしてこの前のーと
は少し違つたじやないかー。」

「た、達弘・・・」

まづい！ともかくこの場から離脱しないと

「いくぞ！ テイオー！」

締羅はティオの手を取つて走り出した

「追つてくると思つていたよ全く。今は逃げるしかない」

振り向くと達弘が物凄い速さで迫ってきた。

「うのうとは今度話すー。じゃあなー。」

締羅はティオを抱えると一気に速度を上げた。さすがに達弘も追つて来れなくなつたようだ。彼は止まつて膝をついていた

「ふう、諦めたか。食つた後のダツシユはけつこうしんどいな」

「どうして逃げるんですか？」

「それは・・・その、まずい状況だからさ」

「なんか疲れてるみたいですね。大丈夫ですか？」

ティオは締羅の顔を覗き込んできた

「」Jのくらいなんともない。少し休めば大丈夫だ

「あの、よければ私に乗つて帰りませんか？」

ティオは少し恥ずかしそうに言つた

「乗つて帰るつてまさか・・・ちよつとまつてくれー」Jなどこのふ
でそんな

「さあ、乗つて下さい、

ティオは締羅の答えも待たず龍に変身した

龍に乗るのか。これはこれでいい機会かもしれない

「じゃあ、お言葉に甘えさせてもらひやつ」

締羅は龍の背中に飛び乗つた

「ちよつとい所にに乗つてくれましたね、

「やうか？」

「準備はいいですか？」

「ああ、いいぞ」

「はー、ではこさますよ、

そつ言ひとティオは青く輝く大きな翼を広げ、一気に飛び上がった。ティオはどんどん高度を上げて行き、雲より少し下辺りまで来ると、真っ直ぐ飛び始めた。下には東京の神秘的な夜景が視界いっぱいに広がっていた。

「うわあ、絶景だな」

「Jの街はとても綺麗ですね」

「ああ、Jの明かりは全部人間がつくったんだぞ?」

「すじいですね、人間って、

そのとおり締羅はティオと同じことを考えていた

本当にすじご。青の世界がこんな技術作り出せるかうなまるまで、後どくらにかかるだろう。

俺の行つた未来はもつとすじかつたな。これより何倍もあるずっと高いビルが立ち並んでいたし、たくさん飛行機とかも飛んでいたし・・・・はつー!

締羅はあるJとて気がついた

「ティオ、すぐに降りるんだー早くー」

‘あ、は、はい！’

ティオは見え始めていた締羅の家に真っ直ぐ急降下した

危なかつた。あそこで飛行機のことを考へていなかつたら今頃・・・
そう、ここ東京は都会なだけに人も多いし、その分飛ぶ飛行機も多
かつた。締羅はそのことに気づき、見つかってはまずいと思いティ
オを降ろさせたのだ。

家についた締羅は、龍の姿のまま家に入つてきたティオを珍しいも
のを見るような目で見ていた

居間にいるとテーブルを挟んで3人分程座れるソファーが置かれて
いる。

締羅はソファーに座ると、ティオはもつひとつの方に座つた。ティ
オの姿は意外と細身な龍で、普通に抱えられそうだった。締羅より
は大きいが。

「で、この世界についてだが・・・」

締羅はそれからこの世界はどんな世界なのか、どんな国があるのか、
どれだけの技術をもつた世界なのかと、この国の決まりを全て教え
た。

「まあ、一度に覚えるのは大変だらうから、そのうちに勝手にわか
つてくれるぞ」

‘結構複雑なんですね。この世界は。ふああ～もう眠いですう’

「ああ、そうだ。ティオの部屋まだ用意してなかつたなあ」

‘私は締羅様のものなんですから、好きにしていいんですよ。でもあまり離れたくないです’

‘そんなこといつてもな・・・俺、布団敷くからティオは俺のベッドで寝るんだ。いいな?’

こうして二人は締羅の部屋に向かつた

どうして同じ家にいるのに部屋が違うだけでそんなにさびしそうにするんだ?

などと締羅は布団を敷きながら考えていた。ティオは既にベッドの上に乗つて体を丸めていた。さすがに龍の姿では狭いようだ。

「じやあおやすみティオ」

締羅はそう言いながら電気を消し、布団に包まつた

‘おやすみなさい、締羅様’

ティオもさう言つて眠りについた

龍の姿ばかりか、寝息の音も大きく、締羅はすぐには寝付けなかつた

第十一話 テイオと共に学校へ（前書き）

遅れてしません・・・

「青の世界へ

その世界のある街に2人の少年と1人の少女がいた

「みんな分かっていると思うが、テイラが向こうに行ってしまった年経とうとしている」

と赤髪の少年

「もうすぐ帰つて来るんだね。テイラとはやく会いたいよ」

もう一人の紫髪

紺色の髪の少女

「あいつ、向こうでは結構平和に過ごしているだらうから、あまり戦いとかはやらないだろ。かえつてきたら、たっぷり戦つてやらないと。腕も衰えているかも知れないしな」

「おじおいルアス、それはいきなり過ぎないかなあ。ちやんと今までのことをか、向こうではどんな風だったとか聞くべきでしょ?」

「ん、そうだな。じゃあそれが終わつて落ち着いたところでやるか

「それがいいわ、それよりレアンは戦わないの?」

「どうちでもいいよ、僕は。フイールはどうするんだよ?」

「しないわよ・・・」「

早く帰ってきて欲しい。締羅・・・

そのいろいろ現実では

「ああ～よく寝た。何時だ今・・・ま、まじか！？まづい、遅刻だ
！！」

締羅は飛び起きようとしたがなぜかティオ（龍）がベッドから落ちて締羅の上で寝ていた。しかも締羅に巻きついて寝ているので身動きが取れない

やけに重いと思つたら、ティオだつたのか。じゃない！「こんなときに限つて！」

締羅は体に巻きついていたティオの体を解き、着替える

「くそ、急がないと。朝食はやむ得ず抜きだ」

締羅の通つている学校は9時までに着かなければならぬ。今は8時20分だ。電車で通学なので駅まで徒歩で10分、乗車時間は20分、着いた駅から学校まで5分程度。何とかなりそうだが、電車が遅れたりする場合がある、そつなるとかなりのタイムロスになり、遅刻も間違いなしなのだ

締羅は全力で駅まで突っ走つた。かなりの速さである。追い越して

いく人も、擦れ違つ人も皆締羅の方に振り返つた。よほど速く見えるのである。

「よし、ついた！」

締羅は駅に入ると券売機に突進し、切符を買つと急いで走つた。

現在8時27分。走つたので思ったより速く着いた。そこへ丁度電車がやつてきた

「おし、ナイスだ！」

締羅は電車に乗り込んだ。車内には誰一人締羅の学校の生徒の姿は無い・・・

さすがにこの時間だからな・・・誰もいなくてあたりまえか。

8時48分。1分遅れで駅についたが、十分間に合つた。締羅は駅を飛び出し学校へ急ぐ。

「間に合つたうだな、あぶなかつたな・・・」

と、そう呟いた瞬間

「・・・様あ〜」

「ん？」

「て・・・ら様〜」

聞き覚えのある声がしたと同時に、締羅の真上を大きな龍の形をした影が現れた。

「ティ……ティオか！？」

「締羅……やつと追いつきました！」

「追いつきましたじゃなし！ まず姿を戻せ！」

「はい、すぐ！」

「……戻りました」

「なんで追いつくんだよー。畠中番せびうした？」

「だつて家にいるばかりじゃ退屈だから……」

「はあー、あのな、お前が学校にいるとまずこんだよ」

「どうしてですか？」

「え？ ……それはーなあ、なんと言つていいのか……じゃなかつた！ そんな場合じやないー。」

締羅は時計を見た。あと5分でホームルームだ

「つべーとつあえずこれ飲めー！」

締羅は薬のよつたものを戻し、ティオに渡した

「」れは?

「透視体薬だ、これでティオは見えなくなる。効果は半日だから十分だ。俺は千里眼薬を飲むから問題ない。行くぞ！」

「あ、
はい」

締羅は急ぎに急ぎ、学校へ飛び込んで廊下を突っ走る。そして締羅のクラスの1年B組の教室が近づいてきた

ガララッ！

ギリギリだったぞ。おつゝ一縞羅。

達弘がそう言つた瞬間チャイムが鳴つた

「ふう、セーフだ」

締縫はほりとて席に座り、ため息をつく

よかつたですね、間に合つて、

「ああ、そうだな」

「どうしたんだ、締羅？」

「ああいや、なんでもない」

俺以外はティオが見えないんだよなここは心で話かけるしかないな

「ティオ、心で俺を呼んでみろ、

「締羅様、

「そうそう、そんな感じだ。今日学校から帰るまではこの状態で会話だ。いいな？」

ティオはこくんとうなずいた

ホームルームも終わり、休み時間に入った

「締羅よお、昨日の子は誰だつたんだあ？」

「ああ、ティオだが？」

「やつだつたのか？随分大人っぽく見えたけど……」

「『氣のせいじやないのか？服装とか変わつてると、見間違つうこともある』

「ん～そつかあ？まあいいか」

「『う』こと教えてやろつか？」

「お、なんだなんだ？なんかあつたのか？」

「絶対に声上げたり、人に言つなよ？もしそれを破つたら……わ

かってるな?」

「わ、わかった! 神戸警つー!」

「よー、あのな、ヒーリングトイオがーる」

「な、なんだつーーー!」(小わな声で)

「今は見えなくしつこる。見たいか?」

達弘は土下座して手を合わせた

「はは、やしまでせんでも・・・ほら、これ飲め

「んぐ・・・お、おおおー・

「えいだ?」

「見てる見てるーかわいーなあー見てるだけでこもれやるハハ」(小わな声で)

「あ、やつか? まあ血口縦介でもしたらいだつだ?」

「うそひは。私はティオ。よひじくね」(小わな声で)

「は、ははは、はこーーー達弘ですかーー」(小わな声で)

「お、やうやう授業だ、座るんだ」

「ああ、やうだなー」

一時間目

達弘は俺のそばにいるティオを見つめっぱなし。まあ、達弘は俺の右上だからずっと振り向きっぱなしというわけだ。だから先生に何度も注意されているが、こりすに振り返る。と、そのときティオがにっこり微笑んだのだが、なんかかわいかったなあ。そのティオの笑みをみた達弘はその瞬間、顔を真っ赤にして鼻血を両穴から噴出しながら、ひっくり返つてそのまま気絶し、保健室へ運ばれた。俺はそのとき笑い出したくてたまらなかつたな。

二時間目

体育で走り幅跳びなのだが、俺は手を抜いて5メートル。ほんとは10メートルも楽なんだが、それはとても無理だ。で、達弘が負けて走りうとしたとき、ティオががんばれーというふうな感じで手をふつたのだが、達弘は頭が爆発しそうなくらい真っ赤になり、先生の合図を無視して走り出した。物凄い速さだつたな。そのままジャンプした達弘はなんと7メートル飛んでいたが、勢い余つて前にすつころんでしまつた。ティオの応援さえあれば全国大会も夢じゃないな。

三時間目

ティオは眠くなつたと言つて眠つてしまつた。しかも俺によりかかつて。しかたないのでおんぶ状態で俺は授業を受けた。達弘は羨ましそうな顔でずくづくと見ていた。

後の事は省略（笑）まあ同じようなことばかりだったから言つくりと

もないだろ。そして放課後。

「じゃな、締羅」

「ああ、またな」

締羅はなにか胸騒ぎを感じた

「なんか嫌な予感が・・・まあいいか」

いつものように帰つていると、ティオの姿がすゝしづつ見えてきた。薬の効果がきたのだろ。

「あ・・・」

「お、もどつたか。家に着くまでもつてほしかつたが、ここまで持ちこたえられれば上出来だな」

「達弘さんは大丈夫でしょうか。鼻血が出てましたが

「ああ、気にするな。よくあるから」

「せうなんですかあ

「せう」

「んなふうに話をしながら平和に帰り道を歩いていた・・・が、そこで災難が襲い掛かることはまだ締羅は知ることはない・・・

第十二話 力の秘密

ティオと二人で帰っていた。すると10メートル程先にある曲がり角から家の学校の制服をだらしなく着た生徒が出てきた。その人数は12人。その中に見覚えのある顔が2、3人ほどあった。その生徒はまさしく以前締羅が吹き飛ばした奴だった。

「つーーー！」

まずいと思つたがもう遅かつた。ばつたりと会つてしまい。隠れることは不可能だった。

「あーーめえこな間のーよくもやつてくれたなーー！」

「お前は・・・リーダーみたいだな」

「おおとも。たっぷりお返しじゃやる。お前らここつをおたぐる」

「まずいーーティオ、俺にかまわざ逃げろーー！」

「ええーでもつーー！」

「いいからいけー！」

ティオはすぐに人気のある場所へ逃げ込む。ティオの安全は確保だ。あとは・・・

「さて、少しば痛い目にあつてもうおつか！」

不良リーダーの克之はおもむろにサバイバルナイフを取り出した。それをティオは影から見ていた

「て、締羅様……」

ティオはどうするともできずただ見ているしかできない

「くー、動けない……！」

締羅は右腕が唯一動かせ、あとは何もできない状態だ

「俺の一撃を食らつてもらおう。でりやあああああー！」

克之は振り上げたサバイバルナイフを一気に振り下ろす

頼む！防いでくれ！ 締羅は右腕を出して頭をかばう。

ガキイイン！

鉄のぶつかり合いつ音と共に液体が飛び出す音。締羅の右腕にはサバイバルナイフが刺さっており血が溢れだして腕を伝い、地面にしたたり落ちる。締羅は表情一つ変えずにいた。

「て、締羅様！……」ティオが呼びかけるが締羅は黙つたままだ

「…………」

締羅はサバイバルナイフを弾き飛ばした。そしてその腕を振るつた。

その腕に当たった2人の不良が吹き飛んだ。そして殴るときの構えになる。すると締羅の腕の皮膚が銀色になり、腕に吸い込まれていった。そしてその皮膚の下は鋼鉄の腕だった。いくつかの溝があり、そこからは青い光が漏れていた。

「な、なんじゃこりやあ！」焦る克之

そして締羅はその拳に力を送る。すると手首あたりから腕輪のようなものが現れ、そこから何本もの棒が出され、青い稻妻を放つ。その稻妻はバリアーように放たれており、締羅を包み込める程の大きさだ。その圧倒的な力を放つ拳は克之の真横にあつた木にぶつかった。

ドガーン！

木にぶつかったその拳から稻妻を帯びた衝撃波が放たれた。木はバラバラに砕け散り跡形もなく消えた。

「ひ、ひいい！なんなんだよてめえ！何者だ！」

「天青 締羅。そのままだ」

「うぐぐ・・・（こんな奴に俺たちがかなうわけねえ。こには一旦ひくしかねえな）に、逃げるぞ！おめえら！」

そして不良たちは我先にと逃げ去っていった

「ぐ、まだ一年経っていないのにこの力を使うと結構くるな・・・」

そのまま締羅の意識は遠くなり、視界も閉ざされた

「締羅よ・・・」

「あ、て、青帝」

「使つてしまつたか。まあ今回のは仕方なかつただろう、龍が危険だつたからな。しかし、ほんのわずかしか力を發揮できなかつたようだが」

「すみません。約束を破つてしまつて」

「いや、いいのだ。それよりも仲間のところへは戻らないのか？みんな心待ちにしているようだぞ？」

「ああ、そうか・・・もう3年になるんだな。そうですね。力が戻り次第すぐに戻りたいと思つています」

すると天王は微笑んだと思つと少しきつい顔をした

「フフ・・・大切な仲間だからな。早くあつてやるといいだろう。しかし力がまだ戻つてないときにはこの技をつかうとやはりお前にはかなり負担がかかる。なにせ今は少しの力しか使えないからな」

「はい、力が戻るまではもうこの力は使いません」

「つむ、お前の体のためにもつかわないほうがいい。では、がんばるのだぞ。あと少しの辛抱だ」

「「「うん・・・」」」は」

「氣がつくと締羅は家のベッドにいた

俺は外で氣を失つたはずなんだが

と、思つてゐると、ティオがベッドの横にある椅子に座つて眠つて
いた

ティオが運んでくれたのか？それなら後で礼を言つておかないとな。
「力の復活は後どれくらいなのだ？」この様子だともうすぐと言
つて良いほどなんだが

「うーん。あ、締羅様！きがついたんですね。よかつたあ！」

「あ、ティオ・・・・・つてお、おい。いきなり抱きつくなよ

驚いたいきなりだきついてくるもんだから。ん？腕に包帯が・・・
もしかして、ティオが手当してくれたのか？じゃあお礼は倍だな

「「」の座我の手当ではティオがしてくれたのか？」

「はい、あの、慣れないもので違和感がありましたら「めんなさい」

「いや、なかなか上手くできてるぞ。あと、俺を運んでくれたんだ

「家まで」

「はい、今の私じゃ無理だったの。龍になつて運びましたが
え？ い、今なんて！？」

信じたくなかった。

「だから、家まで龍になつて運んだんです」

「ああ、もう駄目だ。人にティオ（龍）見られたのか……はあー
ー」

俺は絶望してため息しかでない。ああ、もうおしまいだ、明日の新聞
が気になつてしかたないくらいだ。

「どうかしたんですか？ 締羅様」

「うんや、なんでもない。といつより腹減つたな。買い物行かない
と」

だが外は嵐の如く雨風が激しかった。 そういうや、ティオを見
つけたときもこんな天氣だつたな。稻妻が落ちてきて、その跡を見
に行つたのがはじまりなんだよな

「でも、こんな天氣では無理がありますよ

「ああ、今日はもういかない、前に買い溜めしといたのでなんか作
つてたべようか」

「はい、そうしまします。私にも手伝わせてください。」

「ん? 別にかまわないが、料理できるのか?」

「はい、こう見ても料理は得意なんですね」

「ほう、意外だな。じゃあ手伝い頼む」

「はい、おまかせください」

締羅が材料を取ると冷蔵庫に近寄った瞬間だった。

丁巳年夏月于上海

瞬^ハ部屋^カ真^ニ赤^ニ光^ニはいはなり
すまし^ニ轟^音カ響^カれたる

「というより停電したぞ。よほど近かつたんだな。とりあえずブレーカー戻してくる」

「え、置いてかないでくださいーー！」

真つ赤の雷だつたなー。ティオのときは真つ青だつたけど・・・。
つ！もしかすると・・・

ブレーカーを戻した締羅は外に出てみた。そのとき彼は激しい胸騒ぎを感じた。雷は締羅を家の玄関からでてすぐ前の道の先の野原に落ちていた。野原といったも空き地だが。そこにはティオとあつたときに落ちた雷の穴とほぼ同じ大きさだった。

「な！あ、赤い龍だと！？」

・ 彼はまたも絶句した。今度はその穴に真紅の龍がいたのだから・・・

第十四話 真っ赤な誓い

その雷の落ちた穴にいた龍。それは真紅の鱗を持つ、ティオと同じ形の龍だった。

「…………」

俺は驚いて言葉もない状態だった、まあこうしていても仕方ない。ひとまず家へ運ばないと。

「締羅様。どうしたんですか？」

「ああ、ティオ。お前に似た姿の龍が赤い雷と一緒に降ってきたんだが、仲間か何かなのか？」

仲間だとすれば話は早い。和解にもそつかからないだらう。だが締羅の期待は背かれた。

「うーん、見たことないですね。確かに私と同じ龍の姿ですが、全く見覚えがないですね」

「そうか。ティオもこんなふうにして降ってきたんだぞ。またこうやって同じようにして、同じ場所に降ってくるというのはやはりなににあるに違いないだらう」

「例えばなんですか？」

「向こうの世界のどこかに、時空の乱れが度々起こる不安定な空間の場所があるのかもしれない。で、そこに通りかかった龍がちょうど

どものとき発生した時空の歪に吸い込まれて、ここに飛ばされたといつことも考えられるかもしれない。何故そのとき此処の天気が荒れるのかはわからないが

「ふーん、そうなんですかあ」

「あくまで予想だからな。そつとは限らないだひつ」

「私もこんなふうにして降つてきましたんですね」

「ああ、やつだ。そんときや驚いたぞ。いきなりだつたから。そついえばこいつに飛ばされたときのことは」とは覚えてないのか?」

「はい、やつぱつです。全く記憶にないんです」

「やつか・・・」の龍も怪我してゐるな。ティオと同じ程度だが

締羅はひとまず傷を癒してやつたが、田は覚ます様子は見られない。

「呼吸も心拍も問題ないんだがな。毒があるとしても俺のこの回復術で一緒に消える筈だ。まあ、そのうち田を覚ますだひつ」

「大丈夫なんですか?」

「俺もここまでが限界なんだ。これ以上高度な魔法は使えないな。力を封じられてるからな」

「なぜ力を封じたんですか?」

「「」の世界では無用なんだ。むしろその力 자체の存在がありえない

からな。だがこういう、どうしてもという状況に応じれるようこそ、必要最低限度の力は使える。」

「完全には封じていなんですね」

「ああ、そういうことだ。さあ、夕食を食べて風呂入つてねるか」

「もうですね、リの龍ちゃんとどうですか？」

「 そ う だ な ・・ う 一 む 。 テ イ オ の 部 屋 を 至 急 作 る 。 そ こ で 寝 て も
ら う 」 と こ し よ う 。

「ええ、私は締羅様のお隣で寝ようかと・・・」

「却下。いいか、ティオはこの龍の様子を見てやるんだ。寝ている間に死にましたなんてことは『ごめんだ。しばらく様子をみて異常なければティオも寝ていいぞ。そうしたら後で御褒美だ』

「わあ、嬉しいです！って、そのご褒美とはなんですか？」

「そうだな、好きなだけ甘えていいぞ。ただし！加減を忘れるな」

— わかりました。えへへ

なんか妙に嬉しそうだな

そして夕食も片付き、風呂に入り、さあ寝ようかという時間となつた

「さて、ティオの部屋なんだが、一応しまつてあつたベッドと机を

置いてある。部屋の空いた場所に布団を敷き、そこに龍を寝かせる。いいな？」

「はい、わかりました」

「よし。それじゃあ龍を運ぶぞ」

「どのあたりを持てばいいですか？」

「腹あたりだ」と言おうとしたのだが

「グルル・・・

「あ・・・」

一人の声が重なる

「龍をおけ！」

一人ともさつと龍を降ろす

「グ・・・・・グル？」

龍はわけがわからないという顔をしたが、すぐに一人を睨めつけてきた

この感じ、ティオと同じだな。なんとか沈めなれば・・・

「グルルル！」

龍はエメラルドに光る一つの目で一人の動きを警戒する

「大丈夫。危害を加えるつもりはない」

すると龍の引きついた顔が緩む。締羅は手を差し出す

「ああ、何もしないから」

すると龍は締羅の手に頭を伸ばす。そして締羅は龍の頭に手を置き、優しく撫でる。すると、龍は気持ちよさそうに目を閉じる

和解成功だ。ティオのときよりもスマーズだったな

龍は締羅に近寄ると、身を預けてきた。そう、のしかかりだ。だが締羅はいやといつほどティオののしかかりをくらつてるので、からりじて受け止めることができた。

「うわ、いきなりだな。人間の姿にはならないのか？」

締羅がそう尋ねると、龍は目を閉じた。すると龍が赤い光に包まれ、光の球体となる。その球体が龍の形から人の形へと変わる。次の瞬間には、龍の姿は消え、変わりに赤いローブを身にまとつた13～14歳くらいの少女の姿があつた。真紅に輝く髪を巨大なツインテールに、童顔、エメラルドの瞳を持ち、おとなしそうな顔をしていた。

すると突然龍がしゃべりだす

「ここにちは、お兄様。私の名前はレイジンといいます。これからもどうぞよろしくおねがいします。お兄様のお名前は？」

「え、あ・・・お、お兄様？」

するとレイジンはにこにこ微笑む

「お、俺は天青 締羅だ。よろしくなレイジンさん」

「そんな、さんなんてなくて、レイジンでござりますよ」

「あ、そ、そつかレイジン」

「じゃあ、早速契約とこましょひー。」

レイジンは締羅の手を握る。

「ヒロに、紅龍との契りを結ばんー。」

すると赤い閃光が部屋を覆う。視界が回復すると。そこには少し大人びたレイジンがいた15~16歳くらいで、長いリボンが一つの大きなツインテールを支えている。

「契約完了です。お兄様。これからは、共に過ごしてこましょひー

「え?、あ、ああ」 はあなんかややこしくなつてきそうだ

こつして新たに、レイジンといつ龍が締羅の家族に加わったのだつた・・・

第十五話 テイラの過去夢（前書き）

テ「どうも、読んでくれて非常に嬉しいです。作者も感謝しますよ」

作「あ、ども。初めて書く小説なんですが・・・へへ・・多少へたくそな面があるかもしませんが、頑張りますのでこれからもよろしくおねがいします」

ティ「あの、気づいたことがあります」

作「何？」　ティ「テイラ様の名前が締羅じやなくてテイラとカタカナになってるのですが」

テ「ああ、元々カタカナなんだ。現実の世界では漢字にしてるだけれど」

ティ「じゃあ交互に使っていくんですか？」

作「いや、そうすると読者もこんがらがつてくるから、これからはカタカナでいきたいとおもつてゐる。といつことで読者の皆さんよろしくおねがいします」

全「では、引き続きお楽しみください」

第十五話 テイラの過去夢

荒らされた大地。その地を駆ける無数の兵士達。交り合う武器の音。飛び交う矢、大砲の弾。終わりを告げない何度も起る、そして続く戦。

ここは青の世界の7大大陸の一つ、北半球に位置し、7大大陸では3番目に人口の多い大陸だ。その大陸の名はガイナーブ大陸。そしてその中の国々の境界線。そこでまた戦は起こっていた・・・

兵達は皆、家族のため、生きるため、愛する人のため、平和のため、欲のため、国のためなど、様々な気持ちを持つ者達だつた。中には、戦いこそが自分のためになるという者もいた。

攻め込んできた国アリヴ。

戦を得意とする者達ばかりの軍をもち。ガイナーブ大陸最強の国といわれているのだ。一方、平和主義の国シラク。平和主義国とわ言え、他国からの急襲に備え一応防衛軍はあるのだが、兵の数も力もアリヴとは桁違いである。シラクの兵達は祈術という、特殊な祈りの力をもち、その力を武器として戦っている。が、剣術などはあまり期待はできるほどではない。

そして今、圧倒的にシラクは押されていた。5つの砦の内4つを突破し、既に最後の砦へと迫りつつあるのだ。そこで危険を悟ったシラクは、援軍を要請した。強力な祈術を使う者達だ。その中にいる一人の少年。彼の名はテイラ。青き強大な力を誇る、かつて赤の世界より攻め込んできた大軍をその力を解き放ち、闇へ返したという、伝説の勇者、その後継ぎが彼なのだ。そのことはこの世界の者達は

知らない。ある一部の人を除いては。そして彼以外は・・・
シラクの王都、カルゼア。そして都の中心にそびえたつカルゼア城
の謁見の間。

「おお、ようやく来たか。既に分かっていると思うが、我が国は今、
重大な危機にさらされているのだ。戦場の最後の砦を突破されれば、
奴らの軍は一斉にカルゼアと向かってくる。そうすれば民達は危険
にさらされることとなる。即急に応戦を願いたい。どうか、我が国
を守ってくれ。天絶部隊よ」

王らしきものが天絶部隊といわれた10人ほどの部隊に頼む。

すると天絶部隊の隊長と思われる者が出た

「引き受けました。アリバス国王。我々天絶部隊が勝利に導いてみ
ましょう」

「頼もしき言葉だ。では、頼んだぞ」

「はい・・・、皆の者。すぐに移動だ」

はつ！と隊員たちは声を上げた。そして一人一人が光に包まれ、消
えてゆく。瞬間移動といわれるものだ。そしてアリバスの前にはも
う天絶部隊の姿は無かつた。

「頼んだぞ」

「将軍、アリヴ軍は最後の砦へと接近しつつあります。いかがいたしましょ？」

「むひ。ここを突破されではカルゼアが危険にさらされる。今援軍がこちらへ向かっているはずだ。援軍が到着するまでなんとか耐え抜くのだ」

「はつ！」

数分後、アリヴ軍は最後の砦に到着した

「これが最後の砦か・・・さすがに最後だけのことだけはあって大きいな。まあ、どの道潰すがな。ハーハーハハハ！」

アリヴ軍の将軍は声高らかに笑つ

「ミルセア将軍。伝令です。敵に援軍が加わったとのことです」

「ふん、援軍など無駄なことをしあつて」

「それが、その援軍が天絶部隊のことなのですが・・・」

ミルセアと呼ばれた将軍の顔が引きつる

「なに！？天絶部隊だと！？ふ、ふん！叩き潰してくれようじやないか。行くぞ！進軍開始！」

かよ「ひどい」とせ、天絶部隊が到着した

「将軍、援軍が到着した模様です！」

「おお、そうか！早かつたな！」

「将軍、お待たせしました。天絶部隊隊長マルサユです！」

「よくあててくれた。では、頼むぞー。」

「はい」

こつして天絶部隊は戦場へと到着。まだアリヴ軍は来ていない。この階のつくりは前に大きな門があり、それからしばらく進んだ所にこの階がたつていて。80メートルほどの高さを誇り、カルゼアからもきれいに見える。

そして階の間に立つ。そして横に広がる。一人ずつの間隔が同じくらいに離れると。全員が一斉に黒く輝く剣を黒いマンドの下の鞘から抜く。

「いいか、なんとしても食い止めるのだ。皆、力を尽くせー。」

「はつー。」

「やるか、ティラ。お前なかなか腕がいいそつじゃないか。あの隊長が認めるくらいだ。その腕前、見せてもらおつー。」

「ふつ、まあがんばるうじやないかルアス」

しばらくすると遙か彼方先にアリヴ軍が見え始めた

「行くぞ、全員戦闘準備に入れ！」

全員が剣を真っ直ぐアリヴ軍へ向ける。そして呪文を唱える

「フォースエクニテスタル！」

すると全員の剣が光り、刃先から赤いレーザーが放たれ、真ん中に立つムルサユの剣に集まり、さらに太いレーザーを放つ。

ドカ——ン——！

レーザーが過ぎていったところの地殻が真っ赤に溶けて膨れ上がり、大爆発を起こした。最前線の兵達が跡形もなく消えた。

「な、なにい！？天絶の力はこれほどにも成長していたのか！？ええい、突っ込め——！」

アリヴ軍の進軍速度が急激に上がった

「つー来るぞ。皆生き残るぞ！」

そして天絶部隊は散開した

天絶部隊は次々とアリヴ兵を倒していく

「俺は一気に将軍を討ち取る！あとは任せやる！」

「ああ、気をつける！」

「そつちもな」

「ひしてテイラは仲間と離れ、敵将の元へと走る

「むー貴様は天絶の一人か！」

「覚悟！ミルセア将軍」

ガキーン！

剣が交じり合ひ。

「ほつ、なかなかやるな・・・」

「俺の力はこんなものじゃないぞ。大天烈斬！」

剣を振り上げ、ミルセアを空高く放り上げる。そのままミルセアを追うようにしてテイラも飛び上がる。そして青い炎をまとった剣で強力な斬激を連発する。計17発の斬激を与えた後、一気にその高さから地面に叩き落す。普通の人間では耐え切ることは不可能だ。

「ぐはーま・・・まさか、こ・・・れほど・・・と・・・は・・・」

そしてそのままミルセア将軍は倒れた。

「命までは取れどとは言わない。その証拠に技に手を抜いた。さあ、

早く自分の国へと帰れ

ミルセアはテイラを見上げる

「て、敵に情けをかけるのか？」

「あんたはほんとはいひ人間だ。あんたは自分の軍の力の強さに酔つていたに過ぎない。だから、今度からはその力を平和のために使つてほしい……」

「うー？・・・じつやら私は間違つていたようだな。そなたのおかげで目が覚めた。礼を言おう」

「いや、俺は当然のこととしたまで」

「すぐに軍を引かせよ。この礼、いづれかならずや返して見せよう」

そのときだった。テイラの足元に大砲の弾が当たった

ドカーーン！

「ぐああっ！」テイラは空高く爆風で放り上げられたそのときテイラは右腕に激しい痛みを感じた

「う・・・」そのままテイラは地面に落下した。彼は起き上がり、自分の右手を見た。

「な、う、腕が！俺の右腕が！」するとテイラのすぐ近くに自分の右腕がドサリと落ちる。

「うあああああ——！」　彼は痛みにもだえ、苦しんだ。

「おい、大丈夫か？　おぬし、右腕が……」　すぐに運ぼう

そのときだった。テイラのいる場所に魔方陣が現れた。

「な、なんだ」

魔方陣から光がでてテイラを包み込んだ。次の瞬間には、テイラの姿はなかつた。テイラの腕もきれいにその場から完全に消えてしまつていた。

「いつたいなんだつたんだ···今は軍をひかせるか

ミルセアは撤退命令を出した。

「ん？　なんだ、アリヴ軍が撤退していくぞ」

「まさかテイラがやつたのか。すげえ」　それかしばらくたつたがテイラは戻つてこない

「遅いな、テイラ。なにかあつたのだろうか」

「まあか、やられたんじゃないのか？それとも捕らえられたのか？」

「「ひしていても仕方がない、皆手分けしてティイラを探すぞ」

それから天絶部隊は戦場中をすべて探したにもかかわらず、ティイラを見つけることは出来なかつた・・・

「う・・・」
「ほひは」

見慣れない場所だ。どこだ？「」

ティイラはベッドに寝かされていた。

「はー腕・・・」

ティイラは右腕を見た。するともうティイラの腕はなく、かわりに金属の機会のような腕がつけられていた形や大きさは元のティイラの腕と変わりはない

「いつの間にこんな腕が・・・いつたい誰が」

すると部屋の扉が開き、人が入ってきた。白いフードつきのマントをきておりフードを被っているために顔が見えない。

「田が覚めたようだな」

その人物はテイラに近寄ってきた

「あ、あの。」「は・・・？」

「ああ、」「か。」「は青の城だ」

「青の城？あなたはいつたい？」

「私は青帝と呼ばれる者だ」

「青・・・帝？」

「そのとおりだ、そなたはテイラとこいつのだな？」

なぜ俺の名前を・・・

「あ、はい。そうです」

「そなたの右腕が失われた。だから新たな腕を捧げた。青き戦士のために・・・」

「青き戦士？」

なんなんだそれ？聞いたことがない

「やつ、そなたこそが我が青き力を継ぐものなのだ。その腕は何不自由なく動く。それとその腕に青き力が秘めてある。その腕は元の

腕のように屬す」ことが出来る

青帝がそうこうと、テイラの右腕から銀色の液体のようなものがわいてきて、完全にテイラの腕を覆うと、普通の皮膚の色へと変わった。

「す、すごい……本物の腕のようだ」

「青の力だ」

「その青の力について、詳しく教えてくれませんか？」

「よかねつ・・・青のちか・・うとは・・・

あ、あれ？ 視界が狭くなつていいく。声も聞こえなくなつていいく・・・

そしてテイラの視界は閉ざされた

「・お～～様。おに・・・様。お兄様

「ん・・・」

「お兄様！」

「誰だ？」この子。どうかでみたよつた……いや、つい最近な気がする

「ううん……」

俺は眠い目を擦りながら起き上がる

「やつと起きましたね。お兄様」

「お兄様？」

この響き、聞き覚えがある。はつ！

テイラは全て思い出した

「レイジンか」

テイラは右腕を見た。この腕になつてどのくらい経つのだらうか？
なんだか懐かしい夢を見たな。まだ天絶部隊に居たころの……

テイラは結構夢の内容を覚えていた。夢の内容を覚えていることと
いつのはあまりないことだ

「朝から元気だな」

「何じつてゐんです？もう一時ですよ」

「うーしまつ……」

「今日は土曜日ですよ」

「ああ、そうだった……って、いい加減俺の上から降りてくれ」

「あ、ああ！」めんなさい。とんだ！」無礼を

「はは、そこまでいわなくて」

ティラはリビングへ向かった

「あ、おはようございます。随分と眠つてましたね」エプロン姿のティオが出てくる

「ああ、懐かしい夢を見たよ」

「やうなんですかあ。あ、そこそこ朝食ありますから」

ティオがテーブルを指差す

「あつがとう、わざわざ」

ティオは顔を少し赤らめた

「いえいえ、このへりい別に

この一人も一緒につれていいくのか……なかなか楽しくなりそうだ。早くもどりたいものだな。

テイラは仲間達との再会がとてもたのしみになっていた。そしてその時間は刻々と迫りつつある。・・・

皆と再会するのは嬉しいことだが、それと同時にこちらの世界の人とも別れを告げなくてはならない。だが、一度と戻つてくることはないというわけではないのだから。そう悲しむ必要はないだらう

俺はもう向こうの世界へ帰る準備へと入つた。準備とは、荷物や2人の龍たち。学校のこともある。一番問題なのが学校だ。先生には辞めるということのはまずいから、家庭の事情で引っ越すことになったということにするつもりだ。それと友達との別れ。最後に遊んでおきたいと思つている。

「テイラー、何ぼんやりしてんだ？」

顔をあげるとそこには達弘の姿があった。いつもとかわらない表情。
・・俺が転校すること知つたらどうこうだらうか？

「あ、ああいや、何も。ただ今日の夕飯のこと考えてたんだ」

「昼飯食つたばっかなのにそんなこと考へてたのか」
達弘がどうかしたのかという顔で見てくる

「あ、はは・・・まあな」

そのとき一人の女子がテイラのところへやつてきた

「ねえ、テイラ君」

「ん？ 花宮か。 どうかしたのか？」

「今日そつちの家で一緒に勉強させてくれないかな？」

顔を赤らめて恥ずかしそうに言つ

知り合つて随分経つというのになんで赤面なんかするんだ？ 第一家にはあの一人がいるし・・・無理だな

隣では達弘がニヤニヤしている

なんだその表情は。ティオがいるから俺にとってはまずい状況だということを完全にわかっているようだ。だがしかし、もう一人居ることは知つていよいようだな。だからさうにまずいんだよ

「い、いや。俺は一人で勉強したい方なんだ。だから・・・」

「どうしても・・・駄目なの？」

なんでそんな泣きそうな顔でみてくるんだ。

「ティラ。女の子を泣かしたら、男の恥だぜ〜？」

意地悪そうな笑みを浮かべる達弘

だが、俺は戻らなければならない。そうするとこの一人とはかなりの時間合えなくなるだろ？ 今のうちに色々としておいたほうがいいか・・・

「わかった。来ていいぞ」

すると花宮はやつたと嬉しそうに跳ねる。

学校終わったら大急ぎで家に帰らないと・・・

そして放課後はすぐに迫った。

「寄り道すんなよ」と先生は言つが皆はほぼ無視している。随分と紹介が遅れたが、彼の名は青木真弘。あおきまさひろ 23歳の男性の若教師だ。担任で結構しっかりしている。女子にもいくらか人気があるようだと、先生の紹介はここまでにして俺は早く帰らないといけない。

教室を出ようとしたが不意に声がかけられる。

「ティラ～～」

「ん、なんだ功樹」

彼は富本功樹みやもとこうじとも仲の良い友達である。髪型はシンシン型で、結構マニアックである。特にメイドが好きらしい。

「遊ばないか?」

「すまんが今は大変忙しい。また今度だな」「ちえ～、わかつた。んじやまたな」

「ああ、つてしまつた! 急がないと」

テイラは教室を飛び出し、下駄箱に行き靴に履き替え、そのまま急いで校門を出て駅を目指す。

「なんとか間に合ってくれ……！」

駅に入るとテイラは慣れた手付きで切符を買って改札機に放り込んで電車まで突っ走る。

ピロリロリロリロと電車が出発を知らせる音が聞こえる。

後少しだ。と思ったのだが。

「うあつとー！」

駆け上がっていた階段の最後の一級に虚しく足を取られた。テイラは地面に素早く手を着き、そのまま前転して受け身をとる。怪我はしなかつたが電車はいつてしまつた。

「くそつ」

テイラは駅を出て近くの住宅街を出て人気の無い場所へ向かう。
「ううでいいな

テイラは手を空にかざした。するとテイラの頭上に時空の歪が発生し、そこからスケートボードのようなものが現れた。それには車輪がなく、地面から少し浮いていて後ろの方にジェットエンジンの様なものが二つ付いていた。その横には折り畳まれた翼のようなものがついている。

このボードにはエクションボードと書かれていた。明らかに現在の

技術では製造不可である。実はこれもテイラが誤つて移動した未来から持つて帰つた物の一つだ。

テイラはエクションボードに乗つた。

するとボードは高度を上げ、約10メートル程まで上がる、ジットエンジンを起動させた。するとエクションボードは凄まじい速さで空を駆けた。時速500kmは出ているだろうか。人が耐えれるような速さではないが、このボードには特殊な目に見えないバラアが張つてあるので問題ない。そしてテイラは家を手指して飛んで行つた。

「今夜の夕食はハンバーグなんてどうかな？レイジンちゃん」

「レイジンで結構よ。でもこれからもティオと呼ばせてもらひからねー」

「全然かまわないよ」

「ハンバーグかあ。なにそれ？初めて聞くんだけど美味しいの？」
「うん。前にテイラ様が私に下さつてね。とても美味しいかったの」「へえ～ そななんだ～。じゃあ食べてみる価値あるかも・・・」

一人が家から出て道に出たそのときだった。

キーナーン

「ティオ、何かこつちに飛んでくるみたい」
「なんでしょうね～」

その飛んでくる主はテイラである。テイラは「ちりを見上げている青髪と赤髪の二人の少女に気が付いた。

「ティオとレイジンじゃないか。何処へ行くつもりなんだ」

「あ、あれはテイラ様だわ。テイラ様ー！」
ティオが嬉しそうに手を振っている。

テイラは一人の前に降りた。

「あ、お兄様！」

「二人とも早く家に入るんだ。」

「え、何故ですか？」

「それは後だ。今はとにかく家へ」

テイラは一人を家に入れると、家に花宮が来る」と話をした。

「では、私達はその花宮さんに見つからないように隠れていらう」とですね？」

「そうこういじだ

「でも何故隠れる必要があるんです？お兄様」

「まあ、いろいろとまずいんだ。とにかく、花宮がいる間は俺の部屋にいるんだ。いいな？」

「「わかりましたー」」

そして「テイラは一人を部屋に入れると花面を待つた。

一方テイラの部屋では

「テイラ様のお部屋は片付いていいですねー」

「もうだね~」

ティオはまぶとテイラのベッドの下を見た。

俺はやうじい物なんて持つてないからな・・・

あるといつては一本の鞘に収まつた剣があつた。

だからな」と言つたる・・・

「「なんとこひに剣が」

「お兄様の事だから、もしまに備えて置いてあるのでは?」

「やうかもね

その時、密の訪問を伝えるチャイムが鳴つた。

「は、はこ・・・・

「あの、花宮ですけど」

「来たか・・・・」

テイラは玄関のドアを開けた。

「あ、テイラ君」

「来たか、花宮」

「来ましたよ～」 つと無邪気な笑顔を浮かべながら言ひ。

「まあ、とにかく中へ」

「あ、は～い。おじやましますー」

「うわちだ。ううで勉強しよう。俺は勉強道具取つてくるから少し待つてくれ

「コジングですか？テイラ君のお部屋じゃなこのお？」

「あ、ああ。ちょっと散らかっているからな。ハハハ・・・・

「あ、もしかしてベッドの下に何かあるんでしょうか？」
花宮がニヤニヤしながら見てくる。

ギクッ！…ベッドのしたには剣が・・・・軽く殺傷能力を持つ剣だ。
見つかったら銃刀法違反で警察送りだ！なんとか誤魔化せねば！

「何だ、そのままこモノつて……？」

「ほり、年頃の男の子が持つてるものなんだけれどなあ

年頃だと、年頃の男の子は剣をベッドの下に入れたりするのか？いや、有り得ないな。じゃあ俺は無関係か

「そんなものの俺のベッドの下には無いぞ。むしろ何も無い

「わっかー。やっぱ真面目だね。テイラ君は

なんでそれが真面目なんだ？まあいいか。

「とにかく勉強だ。勉強道具取つてくる

「はーはー」

やつぱ勉強断わつておけばよかつたか……？

はあ……

・・・・・

静まり返った居間。カチカチと時計の音が何時もより大きく聞こえるような気がする。

ああ、先程から黙りっぱなしだから氣まずい。花宮は問題をスラスラ解いているし、俺と勉強する意味無いんじやないか？

と思つてみると花宮の手がピタリと止まつた。

「ん～～～

「じつやら難しめの問題を解いているみたいだ。

「あ～わかんないよ。ねえ、テイラ君。」じつやら難しめてやれと、じつやらの答えが出るの？」

数学の文章問題だった。何故数学しか宿題が出ないのだろうか。それはいいとして・・・なるほど。途中までは解けているようだが、どうやらその先の解き方がわからないようだ。

「これが。これはじつやらで、ああやつて・・・」

「あ、わかった！流石テイラ君だね！」

「ハハ、さうでもないぞ」

今の会話で氣まずかった雰囲気は何処かへいつてしまつた。

まあ俺は気まずい雰囲気さえなんとかなればよかつたがな。

しばらくするとまた静かになり、また気まずい雰囲気に戻つてしまつ。

ああ、またか・・・なんか家に来ていいと言つて損したかな?ああ、もう耐えられん。ティオ達の様子見てくるか・・・

「花宮。俺部屋片付けてくるから気にしないで勉強続けていてくれ

「うん、わかったよ」

ティラは居間を出て自分の部屋のある一階の廊下に続く階段上がる。

あの一人・・・おとなしくしてしてくれるといいんだが。

部屋の前に着いたティラはドアを開ける。そしてほつとした。ちゃんと一人とも部屋にいてくれた。が、何故か龍の姿で仲良く寝ている。

まあいいか。寝ているなら心配ないか・・・

ティラは自分の部屋を後にした。ガチャリとドアが閉まると同時に一匹の龍の目が開く。どうやら寝たふりをしていたらしい。

「よし、ティラ様は行つた。あの花宮とかいう女はどんな人なのかが気になるわ」

「お兄様に手を出したら許さないんだから・・・」

「あらレイジン。私の主はテイラ様よ。私だけのね」

「いいえ、私よティオ。お兄様はきっと私に気があるに決まってるわ」

「何言つてるの？最初に契りを結んだのは私なのよー。」

「そんなの関係ないわー。」

「じゃあ直接聞いてみるとははどう?まあ私だらうがだ」

「そんなのやつてみないとわからないわよ」「二人の間に火花ができる、バチバチと音がなる。」

そして一匹は龍のままなことも忘れ、テイラの部屋を飛び出した。

その頃居間では

「もうこりんは時間があ」

時計の針は七時を指そうとしていた。

「今日はありがとうテイラ君」

「礼には及ばないぞ」

「ねえ、ティラ君は好きな人とかいるの？もしかして付き合つたりする？」

「…………」

「あ、『J』、『J』めんね。こきなりこんなこと聞いたりして。でも気になつたからさ」

花宮は顔を赤らめる

「ああ、俺は今まで好きとか言われた経験ないし、好きな人もいないな」

「そ、うなんだあ」

花宮はほつとした様子を見せた。

「どうかしたのか？」

「あ、ああいやなんでもないよ。ところでさ、Jの前学校に来た女の子つてまだティラ君の家にこるの？」

「えーとそのJは……」そのとき居間の扉が静かに少し開き、龍^{ティオ}が覗き込んできた。幸い花宮は扉に丁度背を向けた形で座っていたから気づかない。

「ああ……」

ティラは扉まで突っ走り、バンと勢い良く閉める。

「花富、そこで少し待つてくれ

「え？ うんわかった

テイラは居間から出るとそのまま一匹の龍を引っ張って部屋まで連れていく。

「あのなあ、ちゃんと待つてろと言つたじゃないか

一匹を部屋に入れたテイラは溜め息をついた

「もう花富は帰るからあと少し待つてるんだぞ

そう言つとテイラは居間へ戻った。

「すまないな。花富。待たせた

「ううん。いいよ別に。じゃあまたね

「ああ、また明日

「なにこいつてるの？ 明田から『ゴーラルデンウイーク』ですよ？ テイラ君のおかげでほとんど終わつたんだから

「あ、そうだったな。じゃあまたな

花富はテイラに手を振つて帰つた。

やっぱ今の人を入れると損をするな。これこそ誘い損だな。

ああ、なんか疲れた。テイラは部屋に戻つた。すると一匹の龍は人

に戻っていた。

「ティイラ様。聞いてほしいことがあります・・・」

「なんだ?」

「私とレイジン。どちらがティイラ様にふさわしいと思しますか?」「ん?どうこう」とだ?」

「だからティイラ様は私とレイジン。どちらの方に気があるんですか?」

なんでこんなこと聞かれなければならぬんだ・・・

第十八話 女心・龍心

「どちらがいいって言われてもな・・・

俺は今一人の質問に戸惑っている。内容はティオとレイジン。どちらの主でいたいかということになる。

「なあ、ティオと前に合体みたいなことしたじゃないか。レザ・・・なんとかだつたか?」

「レザクトですか? あれがどうかしたのですか?」

「ええ! ? ティオ。あなたお兄様とレザクトしたの?」

レイジンが驚きを隠せないようだ

「羨ましい?」

勝ち誇った顔をレイジンに向けるティオ。

「うう、なら私もレザクトするーティラ様ーー」

突然レイジンがそう言うとテイラに飛び付いた。と、同時にレイジンの体が輝きだし、光の球体となり、テイラの体を呑み込んだ。

「ちょ、うわ——！」

「う、ウソ……」

光の球体は輝きを増し、一瞬カツと光るとそこには真紅の輝きを放つ防具に身を包み。背丈の倍程もある長く鋭い槍を手にした、レイジンとレイジンした姿のテイラがいた。

「な、なんだこれ」

テイラは突然の事に戸惑っていた

「そ、そんな……人間は龍一匹としかレザクトできない筈なのに。それが人間の限界なのに。テイラ様……あなたはいったい……」

「え、えつととりあえず元に戻りたいんだが」

するとまたテイラの体が輝き、少し経つと元に戻り、テイラの横にはレイジンがいた。

「やつたね！テイラ様！私達、レザクトできましたよー。」

「よ、よくも・・・レイジン！私とあなた。一対一で勝負しましょう。勝つ方がテイラ様のものよ」

「いいわよ。テイラ様、期待してて下さいねー。」

「え？あ、ああ・・・」

「そんなこと言つてるのも今之内。テイラ様、すぐあなたの元へいきますから」心配なく

「へ？あ、あの・・・」

はあ、これが女心というヤツなのか？さっぱりわからん・・・

二人は龍の姿になると、家を飛び出した。

なつー？ま、まずい！外行つたら一貫の終わりだ。

だがテイラには今の一匹を止めることができず、そのまま一匹は玄関のドアを開けて飛び出してしまった。テイラも急いで飛び出し、弓と透視体薬の入った瓶を召喚して矢の矢じりに透視体薬をつけ、一本同時に放つ、一本の矢は見事一匹に命中したあまり離れた所にいなかつたから当てるのは難しくは無かつた。

「ひとまず姿は消した。だがいつまでも持つことはない。速急に止めなければ」

ティラは千里眼薬を飲むと空を見上げた。一匹の龍は『が刺さつたことにも気付かずに暴れ回っている。そのとき、青い龍のティオが真つ青な炎吐いた。そして紅い龍のレイジンも真紅の炎で迎え撃つ。

「しまった！姿までしか消せないんだった。」

空には青と紅の炎が出たり消えたり。

なんとその火は近くの家に移つてしまつた。

「くそ、アクアウェイブ！」

ティラが火が移つて燃え上がつてている家に手を向けた。

「きやあ！火事だわ！」

近くにいた中学2年くらいの少女が叫ぶ。

やめてくれ！大騒ぎにしたくないんだよ！

ティラの手が光り、彼の前に巨大な水柱が現れ、凄まじい速さで燃えている家に突き進んでいく。

バシャー——ンと大量の水が飛び散る音がする。見事に家の火は消

えていた。不幸中の幸いこの家は空き家だった。

ティイラは今だに戦っている一匹の龍に叫んだ。

「おいーもっやめろー周りに迷惑がかかっているぞー。」

「ティイラ様！邪魔しないでください！」

「そうです！これは真剣勝負です！ティイラ様は何もしないでください！」

「説得しても無駄みたいだな・・・おい！いい加減にしないと怒るぞ！」

「喰らえ！」

ティオが前足の鋭い爪でレイジン攻撃する。突然の接近攻撃にレイジン反応が遅れてしまつ。

ガキ！

なんとか爪で防いだレイジンだったが。攻撃の衝撃までは防ぎきれず、火のついていた家に叩き落とされる。

ドゴーンと大きな音がして家の屋根が崩れた。

「いたた・・・やつたわね！じゃあこれほどお？」

レイジンは火の玉の様なものを放った。それはかなり速かつた。ティオはなんとかかわすがそれはティオを追跡してきた。ティオは火を吹いたが火の玉の方に押され、喰らってしまつ。

「うあつ！」

ティオは法もでしまい、地面に落ちそつになつた。

くそ、もつ強制的に止めるしかない。

ティラは家に戻ると自分の部屋へいき、ベッドの下にある剣を取り、外へ出た。レイジンはすでに空に上つており、また戦い続けている。

「二人共！止めないと斬るぞ！」

“もう放つておいてください！”

と同時に言つてくる。

「それができないから止めると言つてゐるんだろー。」

‘もう家に入つていってください！’

とティオが叫ぶ。

くそ、こんなことのために俺は剣を使いたくない。

そのとき、ティオがかわしたレイジンの火の玉が先ほどいた中学2年くらいの少女に襲いかかる。

「つー危ない！」

ティラは

助ける時間までは無かつたので少女の前に立つた。そしてまともに火の玉を喰らつた。

「ぐあつー！」

「ああーだ、大丈夫ですかー？」

「ああ、このくらい大丈夫だ。くそ、もう我慢ならない！」

ティラは持つていてる剣を鞘から抜いた。見るには極普通の剣だ。ティラは剣に力を送る。するとその剣は輝きだし形を変え、ティラの背丈ほどもある巨大な大剣になつた。

「二匹は危険だ。逃げる」

「あ、は、はい！」

そう言つと少女は逃げて行き、やがて姿が見えなくなつた。

テイラは二匹の龍を睨みつけると、空高く飛び上がり、二匹の龍のいる所まできた。

「な！？て、テイラ様！」

「天空の剣技、斬天激！」

テイラはそう言つと二匹に手に持つ大剣で連激を喰らわせる。ドガン、ドガンと一撃が重い音がなる。計8発の連激を与えた後、切り上げて後ろに宙返りし、その勢いに乗せて縦切りの構えにもつてきた。そして叩きつけた。

ドカアン！

二匹の龍は凄まじい速さで地面に落ちて行き、地面に力一杯叩きつけられて共に気絶していた。

「ふつ、つい本氣を出しそうになつた。本氣を出していれば一人は確実に跡形も無く消えていだろうな」

テイラは地面に降りると大剣をもとに戻し、鞘に納めた。

「全く。一人が来てから俺の生活は非日常だ」

テイラは二匹を担ぎ、家に入った。

二人の寝床作らないと。傷治さないといけないな。ひとまず俺の部屋に置いとくか。

そう言つとテイラ二匹を傷を治して部屋を後にし、夕食を食べ、さつと風呂に入った。

テイラは湯船につかつてぼんやり考えごとをしていた。

ああ、なんか大変だつたな今日は。

早く青の世界に戻りたい。

が、それは自分に力が戻らなければできない。

青の世界に戻るにはその力が必要となる。

その力で青の世界に繋がるブルーラインゲートという時空の歪をつくることができる。

赤の世界にはレッドラインゲートを通らなければならぬ。

青と赤の世界は元々ひとつだった。

ブレードルとよばれている世界で、青の世界と赤の世界に分かれているのだ。

その一つの世界の間に大きな争いが起じた。それがブレードル終末戦なのだ。それからは何年か経つた。現在は青と赤の世界は争いを止め、共存する道を選んで平和が訪れているらしい。この世界に龍が迷い込んで来ることはあつてはならないことだ。青の世界に戻り次第、直ぐにその原因を突き止めらければならない。さて、もう上がるか。

ティラは風呂から上がり、部屋へ向かった。部屋に入ると、敷いた布団の上で眠る一匹の龍に掛け布団を掛けてやるとベッドに潜り込み、直ぐに眠った。

青の世界に戻る日がまた一日、一日と迫りつつある・・・

翌朝

朝9時を時計が差している。連休中だからこの時間まで寝ていても特に問題は無い。

「朝・・・か。あれ、なんでティオがベッドの中にー?」

ティラは反対方向を向くと予想通りレイジンもいた。

「朝から何なんだ！」

テイラは一人り腕を組まれ、動けない状態になっていた。

「う～ん。あ、おはようございます。テイラ様」

ティオが一コリと微笑む。

「あ、ああおはよっ」

「おはよっ」ぞります。お兄様」

「レイジンも起きたか」

「一人ともなんか仲良くなつてないか？」

「なあ、一人ともなんかあつたか？」

「うふ、昨日テイラ様が寝た後私達仲直りしたんです。ね？レイジ
ン」

「うん。そうだよ。」めんなさいお兄様。勝手に喧嘩なんかしてしまって。お仕置きでもなんでもしてくださいー。」

「あの、私もすみませんでした。テイラ様の気持ちも知らずに・・・

」

「いや、俺の方こそ悪かった。俺にふさわしいのは二人共だ。契約した以上、俺が責任を持つて二人の主を努める。だが、俺は一人を下僕扱いはしない。絶対にな。だからこれからも宜しくな。一人屋へ向かつた。部屋に入ると、敷いた布団の上で眠る一匹の龍に掛け布団を掛けてやるとベッドに潜り込み、直ぐに眠った。

青の世界に戻る日がまた一日、一日と迫つつある・・・

第十九話 五連休 一日目 剣を極めし友

「ゴールデンウイーク 一日至

計五日間の連休となつてゐる。何をして過ごすか迷つ。剣の練習でもしておつか…

庭に出ようとするとい、家のチャイムが鳴つた。

「あ、テイラ様。私達は向いの部屋にいるんで

「ああ、すまない」

ティオも分かつてきただよつだ。

「はい・・・つて、光羅木じゃないか」

「おはよっ、テイラ。今日暇か？」

この少年は光羅木^{みつらき} 隆司^{りゅうじ}同じクラスで剣道部に所属している。キリツとした目に俺より少し長めの黒髪。なかなかいい顔をしており、女子に人気もある。だが彼は取り乱すことのないしっかりした心を

持っている。つまり精神が強いということだ。だから剣道などにはぴったりな体をしているのだ。

「ああ、特に何もすることはないな」

「そうか。なら話は早い！突然で悪いと思うが手合せ願いたい！」

「ああ、別に構わないが？」

隆司は剣道一直線で、前に俺と手合せしたいと言つてきたのだ。何故俺なのかはわからないが。それで俺があっさりと勝つってしまったのだ。三年の先輩も相当驚いていた様で、全国大会制覇できると言つてきて是非入部してほしいとのことだったが、俺は断つた。何故なら俺はこの世界の住人ではないし。あまり人に知られたくない無かつたからだ。

「よし、じゃあ早速我が道場へ！」

「あ、待つてくれ、すぐ準備して来る」

「わかつた」

ティラは家に戻るとティオ達のいる居間に行くと一人を呼んだ。

「俺、ちょっと出かけて来るから留守番一人で頼む」

「私達もお供しま・・・」

「駄目だ。帰つてきてから遊んでやるから、ちゃんと留守番していってくれ」

そう言つと一人は目を輝かせた。

「「おまかせください！ティラ様！」」

何か微妙によくハモるなこの二人・・・

「じゃあよろしく頼んだぞ」

「はいー。」

「行つてらっしゃいませー。」

ティラは居間を出ると自分の部屋へ行き、念のため財布を持って玄関に向かい靴をはぐと外へ出た。

「待たせた」

「よし、じゃあ行くか

そうして俺達は光羅木の家でもある道場へ向かつた。
「やつた。テイラ様が遊んでくれるつて

「散歩に連れてつてもいらおうよ

「あ、いいねそれ。じゃあ散歩にしようか

「うん。楽しみだね

「そうだね」

数分して俺と隆司は道場に着いた。

「さあテイラ。袴はがまに着替えてくれ

「ん? 防具じゃないのか?」

「防具だと何かと動きづらい。視界も悪くなるからな

「それもセリフだな」

そして二人は袴に着替えた。

「なかなか似合ついるぞ。ティーラ」

「セリフ?」

「ああ。じやあ空き地に行くぞ」

「道場でやるんじゃないのか?」

「ああ。空き地の方がずっと広いから好きなだけ動き回れるからな

「なるほどな

俺達は道場から出て空き地に向かった。すぐそこにあるので時間はかからない。

テイラ達は木刀片手に空き地へと走る。幸い誰にも見られずに空き地へと到着した。

「よし、じゃあ今から五分間準備の時間とする。準備体操するもよし、瞑想するもよし、素振りするのもよしだ」

「わかった」

こちらの世界来て以来、モンスターとは全く戦闘経験がない。一応剣で素振りして腕の衰えを防いでいるが。についてはもいいかもしれないな。

テイラは軽く準備体操して素振りをする。

あまりやり過ぎるとといけないな。瞑想するか。

・・・

精神を研ぎ澄ませば、相手の技が良く見切れるようになる。だから瞑想しただけでも変化は大きいのだ。個人差はあるが・・・

「・・・よし、俺の方は準備万端だ」

「そうか。少し早いが始めるとしよう」

「ああ。先攻はそつちからでいいぞ」

「わかつた」

隆司はそう言うと空き地の真ん中に線を引いた。二人はその線から五メートル程度離れた所に立ち、お互に向かい木刀を構える。隆司は腰を落として木刀を両手で持ち前に出して構える。標準的な構えだ

テイラは普通に立ち片手で木刀を構えもせず持っている。

「では行くぞ、テイラ」

ざわざわ

「なんかギャラリーが来たみたいだな」

空き地の入口には人だかりができていた。

いつの間に・・・気が付かなかつたな。

ギャラリーから声が聞こえて来る。

「ねえ、あの人って中学のとき全国大会にでてベスト5の記録を残した光羅木 隆司じやない？」

「えー..そつなの？じやああの人は誰？」

「さあ、私見たことないよ。あの光羅木 隆司と戦つんだから、よつぽどの腕なんだろうねえ」

同じ学校ではないと思われる同じ年くらいの女子生徒たちの声が聞こえてきた。

「ま、まあとにかく始めよ。」

「ああ、そうだな。来い。お前がどのくらい腕を上げたか見せてみろー。」

「そのつもりだ！行くぞ！いざ、尋常に・・・勝負！」

隆司は木刀を構え、テイラに向かつて突っ込んだ。一人の距離は一気に縮まった。

「あれから長い時間をかけて編み出した必殺技。疾風の剣を受けてみろ！」

隆司はそう叫ぶと木刀を横に構えた。すると彼は凄まじい速さでテイラに斬り掛けた。

が、テイラは首を傾けてそれをかわした。

「な、何！？俺の必殺技がかわされただと！？ くっ、でやあ！」

隆司はすぐに体勢を立て直し、思いきり木刀を振るった。

ガキッ！

テイラは片手の木刀で受け止めた。

「す、す」ーーいの人！あんな速いわざを避けてるよ。私は全然見

えなかつたな）。しかも片手で受け止めてるよ

「全国大会余裕で優勝できるかもよー。」

女子生徒達に続いて他の人のざわめきも聞こえてくる。ざわざわしていて何を言っているのかわからぬ。

「隆司。攻撃が当たらないからと焦るな。焦ると精神が崩れるぞ」「そ、そうだな。俺はまだそこが修行不足なのかもしないな。なすべを失つても集中する・・・か。さすがだな。テイラ」

「いや、お前は強くなつたぞ。まさか疾風の剣を覚えるとはな。普通のプロだと5年以上は確実にかかる。だがお前は一年程度で身に付けた。これは凄いことだぞ。」

「テイラはどのくらいのかかつたんだ？」

「一、二日だ。初歩的な技だからな。」

「すごいな・・・やはりテイラは剣の達人と呼ばれてもいいほどの腕があるな。いや、この場合剣の超人だな」

「やうか？じやあ見せてやる。これが俺の疾風の剣だ」

テイラはさう言つと逆手返りをしてして距離をあけ、そして木刀を逆手に持ち、構えた。次の瞬間テイラの姿が消えた。

ヒュン！ガキイ！

風を切る様な音と共に隆司の木刀が一瞬にして折れ、空を舞つて地面に突き刺さつた。

「なつ！？」

隆司が振り向くと先ほど消えたテイラがいた。

「今消えなかつたか！？」

「肉眼では捕えることの不可能な速さで相手の隙に一気に潜り込んで斬つた。この技は使えば使う程強力になる。無論斬る速度も上がる。どんどん使ってこの技を極めてみる。頼りになる技だぞ」

「ほほう、なるほどな。わかつた。そつする。色々と教えられたな

「礼を言われる程でもないぞ」

「しかし、テイラはビリでそんな腕をつけた？そこでどんな修行をしていたんだ？」

「ここでは到底無理のある修行だ。お前程の実力があれば切り抜けられると思つた」

「それはどんな修行なんだ？教えてくれ！」

「それはできない。外には漏らすことのできないことなんだ。すまない」

「そうか・・・残念だ」

隆司はテイラの肩を掴んで揺さぶつたが、テイラの答えを聞くと残念そうに肩を落としてため息をついた

俺はモンスターとの戦いを繰り返しながら腕を磨いてきたからな。いつの間にか強くなつていた。もちろん俺も最初は素人で構えすらできていなかつたし、鞘に剣を納めるのもなかなか上手くできなくて大変だつた。

モンスターとの戦闘を繰り返して旅をしていたのだが、気がつくと強くなっていた。自分が強くなるにつれてモンスターの方も強力になつてたりしたから、あまり実感は無かつた。

「よし、もう一度やるが。予備にもう一本木刀を持ってきていたから、それを使おう」

「ああ、今度は技無しの戦いだ。ちゃんとした真剣勝負にしたいからな」

「そうだな。ありがとうティラ。お前のおかげでここまで強くなれた。そして俺はもっと強くなつてみせる！」

「ああ、頑張るんだぞ。努力は必ず実る。流した汗は決して嘘をつかない。さあ、かかるて来るんだ」

ティラは木刀を構えた。隆司も木刀を取り、構える。

「行くぞティラ…やあ…」

ガキンッ

テイラは振り下ろされた木刀を防ぐ。隆司は攻撃を止めずに縦、横、斜めと連続して斬つて来る。

ブンッ、ブンッと木刀が空を斬る音が聞こえてくる。テイラは隆司の攻撃を全てかわしている。体を反らせたりするだけで無駄な動きは特にしていない。

「くっ、全く当たらない。ちゃんと狙っているのに」

木刀を振りながら隆司は言った。

「それだけでは駄目だ。集中しろ」

「集中するだと?俺は十分集中してる。そうしないと真剣勝負にならないだろ!」

隆司はテイラはの後ろに一瞬で回り込み、木刀を振り下ろす。が、テイラは振り向きもせずに受け止めた。

「これも駄目か・・・」

「もつと集中しろ。お前は十分は速さで振っている。人の目も追い付きにくい程だ。が、まだ俺からしてまだまだ遅い」テイラは振り向き様に木刀を横に降った。隆司は防ごうとしたが、その前にテイラの木刀が隆司の脇腹を捉えた。

「ぐう、速すぎて見切れない……」

「一旦攻撃を止めて瞑想したらどうだ？手は出れない」

「だが今は戦闘中だ。そのようなことは……」

「俺の攻撃を見切りたいのだろう？」

「そ、それはそうだが

「別にこの戦いは命を賭けたものじゃないのだから、そのくらい構わない。命に危険があるわけでもないだろ？」「…」

テイラの言葉に隆司は迷った顔したが納得したのか、木刀を鞘に納めた。

「わかった。少しの間瞑想させてもらつ

隆司はそつと地面に座り、木刀を置いて瞑想を始めた。

その間テイラの家では

「ねえねえティオ。ティラ様の部屋のベッドの下にこんなものがあったよ」

「なになに？・・・つてこれ、剣じゃない！勝手に扱つたりしたら駄目だよ！怒られちゃうよ？」

「うん。でも長いねえこの剣。こんな剣をティラ様は使つてゐるのかな？」

その剣はとても長く、刀身だけで150cmはあると思われた。

「ほんと長い剣だね。私達の背丈ぐらいあるよ。」

この場合剣ではなく太刀である。太刀とは言え、刀身は曲がつてお

らず、真っ直ぐである。しかも刀ではなく、西洋風の剣を元に作られているようだ。簡単に言えば、刀身のとても長い剣だ。太刀とは言い難い。

「とにかく、テイラ様のお部屋に返しておいでよ。壊したりしたら大変だよ？」

「一回剣を抜いてみたいなー」

「そのくらい、いいんじゃないかな？」

「じゃあ抜いてみるね。それ！」

レイジンが勢いよく剣を抜いた。

ジャキーン と鞘から抜かれた剣が音を響かせた。銀色に輝く刀身に紋章のようなものが刻まれていた。

「うーん。重いよおこの剣～」

レイジンは頑張って剣を持ち上げるが、すぐにガシャリと下りてしまつた。

「ねえ、いい見て」

ティオは剣の柄の上を指差した。そこには龍の顔の形を作られている部分があった。

「龍の顔だ。なんかこの剣は特別な感じがするね」

「うう。龍の眼光つてるよ。ちょっと曖昧悪いかも・・・」

「早くしまつちやおひよー。」

「うそ、やうだね。部屋に置いてくれるよ」

ティオはティラの部屋に剣を戻しに行つた。

空き地では・・・

「よし、瞑想は終つた。始めよ！」

「わかった」

それから俺と隆司は決闘を続けたが、俺の勝利となつた。俺自信、隆司はとても上達したと思つている。

「ああ、やつは前にならぬかなわないな

「いや、お前はすぐ上達した。喜んでいいんだぞ？」

「テイラはやつが、俺はまだまだ修行が足りない……強くならな」と。お前みたいにさ

「そこまで強くならなくていい。俺はもう強くあります……のかも」

まだ力が必要なら、その分修行するが……

「やつが。まあ、今日まで終つてやつ

「ああ、やつよ。」

気がつけば時刻は四時を回っていた。

早く帰らないと。ティオ達との約束があるからな・・・

「それじゃ俺はもう帰るから」

道場に戻り、私服に着替えた俺はすぐに帰ろうと急いでいた。

「ああ、わかった。今日はありがとな。いろいろ勉強になつた」

「それはよかつた。じゃあ急いでるからまたな」

「じゃあな」

それから俺は大急ぎで家に帰った。

「ただい・・・」

「ティイラ様――！」

「お兄様――！」

「うわっ、ちよ、一人同時に来るな！」

ただいまのまを言おうとしていたティラだったが、一人に遮られ、飛び付かれた。そして倒れた。

「ティラ様！ 私達お散歩に行きたいです！」

「いて・・・ん？ 散歩か。ああ、別に構わないぞ？」

「じゃあ早速行きましょうお兄様！」

「ああ

ティラは一人を退かし、倒れた体をよいしょと起こして立ち上がった。

ティラはレイジンの服を見てふと思った。

レイジン、服持つてたのか？ いや、これはティオのかもしれない。まあ、あまり気にすることでもないな。わざと散歩行くか・・・

散歩に出かけた俺達は今、河川敷にある細い一本道を歩いている。道はとても長く、海まで続いている。川の流れに沿って行けば、そのうき海に出る。所々に橋があるので、ある程度行つたら反対側に同じ様にある道を歩いて帰るつもりである。

「おい一人とも・・・そんなに引っ付くな。歩きにへいだろ」

俺の家から少し離れた所にこの河川敷があるのだが、そう距離は無いので、たまに散歩に来たりする。

この二人と来たら家を出て今に至るまでにずっと俺に引っ付いていたのだ。

いわば、両手に華状態・・・どうりで周りの視線が痛かった訳だ。家は高層ビルが立ち並ぶ大都会から少し離れたところにある住宅街にある。住宅街とはいえ、その外はビルだらけだ。俺はマンションとかより普通の住宅で生活したかったから、この大都會にある数少ない住宅街に住むことができたのだから、それだけでも十分感謝している。

「で、でも〜。私はティラ様に引っ付いていたいです」

「ティオ。お兄様は私達のご主人様なんだから、ワガママはいけないよ。私も引っ付いていたいけど、お兄様がそつまつなら従います」

「そうね。レイジンの通りだね。『めんなさいティラ様。私の
ワガママで迷惑をかけてしまいました・・・』

「え、あ、いや迷惑とかそこまでないから別に何ともないから・・・

」

大げさだな、ティオは・・・それに、俺はこの一人の主という自覚
がない。こういう関係にはあまり興味はない。だから俺は一人を決
して下僕扱いしない。

ティオは暫く引っ付いていたがようやく離れた。

ティオが申し訳なさそうに頭を下げた。

俺はティオの頭を撫でてやつた。

「うひゅ〜〜

とティオは変な声を出して気持ちよさそうに目を閉じた。

ね、猫じゃあるまいし……

俺は一人の主だとか思つたことはない。なんと言つべきか、身分の差とかいうのはあまり興味はない。だから俺は一人を下僕扱いには決してしない。

「あーいいな～ティオ。私も撫でてもらいたいな～」

ふとレイジンと田があつた。

うわっ、何でそんなに上田使いなんだ。ひょっとして撫でてもらいたいのか……？

「……」

じ

「……」

じ

「……」

じ～～～！

「…なんだよ全く。そんなに撫でてもらいたいのか?しかも最後のじ~がほんと睨みつけてただろ…前にもなかつたか?こういつの。ああ、あれはティオだつたな。

俺は無言でレイジンの頭に手を置き、撫でてやつた。するとレイジンは満面の笑みを浮かべた。そんなにいいものなのかな?

暫く一人を撫でた後、また歩き始めた。

何でこんなことをやつていたんだ俺は…

川の方へ田をやつた。よどむことなく流れづける。川の川はあまり汚れない川で、魚とかも見掛けることも少なくない。だから釣りに来る人をよく見掛ける。実は俺も達弘と何回か釣りに来たことがある。今日は一人も釣りに来てはいなかつた。

「ティラ様、何をぼんやりしているのですか?」

「ああ、いや、川に映る夕日が綺麗だなとか思つて」

「やつですね」

川に目をやつたティオもじつと見続けた。

ティラは左側に見える川とは逆の右側を見た。そこには馴染んだ風景があった。少し先に自分の家のある住宅街が見え、そのずっと先の方に沢山の高層ビルがそびえ立っているのが見えた。

ここから見る夜景はとても綺麗だ。この一人にも見せてやりたいなま、そのうちだな。

ん?なんか雲つてきてないか?そういうえば今日は夕方から雨が降る。とか天気予報で言つてたような気がする。気が付くと夕日はこの日の終わりを告げるのように遙か遠くの山に吸い込まれた。それを待つていたかのように夕日の沈んだ山の向こうからじす黒い雲がこちらに向かって流れてきてる。あまりもたもたしているとまずいだろう。

「二人共、そろそろ帰るぞ。雨が降りそうだ」

「そうですね。もつちよつと散歩したかったんですけど仕方ないです
ね」

「じゃあ早く帰つましょ。私も腹空きました」

「さうだな。俺も腹がへつてきた

そして俺達は急いで家へ帰った。玄関のドアを開けた瞬間一気に降り出した。

「なんとか濡れずに済んだようだ

「ふう、危なかつた」

レイジンがほっとため息をついた

「さて、夕食食べるか

それから俺達は夕食を食べて暫くして風呂に入ろうと脱衣場に行くとティオとレイジンが一緒に入ると言つてきただのでつまみ出した。風呂から上ると一人ともがっかりしていたが何を思ったのか、俺の元ひ駆け寄つて来るなり言い出した。

「風呂は駄目だったから、寝るのは一緒ですよ～

最近疲れやすい原因はこの一人にあるのかもしねない・・・

第一十話 五連休一四日目 突如現れた巨大なザコ敵1（前書き）

すみません・・・受験が迫ってきてるので小説書いたりしてる場合じゃなくなつてしまつて次話を探すのがいい加減になつてしまいました。1月下旬に受験があつて結果が出るので、次の話が出されるのはその後になる予定です・・・ホントこんな中途半端になつてしません。受験もこの小説も一生懸命がんばりますのでこれからもよろしくおねがいします。

ティオ「がんばつてくださいね～繩雄様！」

繩雄「お、おいおい・・・俺はお前たちの主じやないんだぞ？」

ティオ「いいえ、」この話は繩雄様によつて作られているのですから、繩雄様が第一です

繩雄「そ、そうか・・・わかつた」

レイジン「しばらく私たち出れませんね～」

繩雄「すまん・・・俺も必死なんだよー」

ティラ「俺つて受験経験ある設定になつてるのか？」

繩雄「ん？ああ、そうだ。そつなつてるだ」

ティラ「大変だつたな・・・受験は」

繩雄（早速応用しやがつた・・・）

テイラ「どうした繩雄？」

繩雄「いや、なんもないよ」

ティオ「受験つてそんなに大変なんですね」

レイジン「私たちはそんなのありませんでしたから」

繩雄（な、なんかムカつく・・・）

ティオ「まあ、がんばってくださいね～」

レイジン「受験なくてよかつたね～ティオ！」

ティオ「うん…やつだね！」

繩雄＆テイラ「お前らに受験の苦しさなんてわからないだろひ…・・・」

ティオ＆レイジン「ひええ～、『めんなかーーー！』

テイラ「待てーーー！」

繩雄「全く・・・あ、取り乱してしまいましたね（ヤバイ！前書き長くなりすぎた！）・・・では21話。どうぞ。（にしてもティラがあんなに取り乱すなんて珍しいなー）」

第一十話 五連休一日目 突如現れた巨大なザコ敵1

ああ、もう寝よう。

部屋へと向かおうとしたのだが、一人に引き止められた。

「一緒に寝たいです〜〜〜」

「・・・散歩連れてつてやつたのだからそれで十分だろ？？」

二人は同時に首をブンブンと振つて否定した表情を見せてきた。

「なぜそこまでして俺と寝たがる？なんか訳があるのか？俺が好きなんて理由なのかな？」

すると二人は困った顔をした。

「こんな」と言つたのはまずかったか。

「あの・・・私、その、好きって言つのがよくわかりません」

「私もです。食べ物が好きと言つのはわかるんですけど……お兄様が好きと言つのはよくわかりません」

レイジンもティオに続いた。

何が言いたいのか初めはよくわからなかつたが、だんだんわかつてきた。

つまり、この一人にはまだ恋愛感情が芽生えていないのだ。まだほんの少しちゃ・・・だから俺のことが好きなのかと聞いても理解できなかつたのだ。この一人は相当な天然と思われてもおかしくはないだろう。俺としてはあまりにも突然に聞いてしまつたから、二人は混乱してしまつたのかと一瞬思つたが、安心した。

「まあ、この好きと言つ意味は自然とわかつてくるから気にするな

今はこいつ言つておこいつ。では、何故そんなにまでして俺と寝たがるのか？ ただなんとなくなのか、一人揃つてよほど寂しがりなのか・・・

・聞いた方が早いな。

「なあ、一人は何故そこまでして俺と寝たがるんだ？」

「ん~、えつですね。どうしてか、ティラ様と一緒に寝てると

番落ち着くんです。何故かはわかりませんが・・・私、一人で寝て
いるととっても寂しいんです。だからティラ様と寝たいんです」

俺と寝ていると落ち着くだと?じゃあさつきのは的外れな勝手な想
像に過ぎなかつたのか?だが引っ掛かるな。

一人で寂しいといふのはつまり、孤独を表している。

もしかすると向こうの世界にいたときはずっと孤独だったのだろう
か? そうだとすれば、そのときの寂しさが心に刻まれていて、今も
一人になると寂しくなつてしまつということになるのかもしない。
二人には向こうの世界にいたときの記憶は無いと言つていい。これ
では聞いても意味がない。とにかく、寂しかつたのだろう。誰かと
いふと落ち着くと言つのは、俺は親代わりみたいなものなのか?

「さうか。まあ、今日くらいいいだろ? だが、あまり引っ付くな
よ?」

今日で最後にしたいところだ。今度からは自分たちの部屋で眠つて
もらひ。そうなれば俺はいつも通りに寝ることができる。

「ありがとう」わざとまわーー!」

「さすがお兄様!」

「大げさだな・・・」

俺のベッドは元々一人用だが、俺がいつも一人で全部占領して寝ている。二人分の広さがあるから一人だと思いきり手足を伸ばして寝ることができる。この広さだから、ティオとレイジンが寝てもそれほど窮屈ではない。

「ティラ様のベッドはふかふかして広いから気持ちいいです！」

確かに「ふかふか」している。何故かこのベッドのバネは異常に強力なやつなのだ。だからこのベッドで跳ねると結構飛び上がる。たまにそれで宙返りとかしている。

「ああ、一人ともベッドに入るんだ」

「あれ？お兄様は入らないのですか？」

「俺はやる」とある。先に寝てろ

「やるって、何するんですか？」

ベッドに入りながらティオが聞いてきた。

「宿題と武器の手入れと整理だ。最近あまり扱っていない武器とかあるからな」

「そんなこと明日にした方がいいですよ」

「だがレイジン。今何時だと想ひ？まだ九時半を過ぎたばかりだ。
寝るには早すぎる」

そう言つとテイラは屈みこんでベッドの下に手を入れよつとした。
が、ベッドの下の暗闇に不気味な赤い光が一つあつた。

なんだ、これは？

テイラは手を伸ばしてそれを取りた。それはレイジンが持ち出してくれた剣だった。赤く光っているのは龍の顔の形をした部分の目だった。

「…？何故目が光っているんだ？今までこんなことは無かった…

」

「あ、あのお兄様」

レイジンが困った表情でテイラを見た。

「ん? 何だ?」

「あの、その剣私抜いたんですけど……すみません。す、すぐ部屋にしました。ちゃんと入れ物に入れて……」

入れ物とは鞘のことか……

「この剣はレイジンが扱った後に光り始めたのか?」

「はい、恐らく……」

「実はな、この剣は今まで全く鞘から抜けなかつたんだ。どんなに引っ張つても、何人掛けで引っ張つても抜けなかつたんだ。封印が掛つている様だつた。当然、この目も光つてなかつた。それがレイジンがいくら引っ張つても抜けはしなかつた剣を易々と鞘から抜いた。ということはこの剣はお前達に何か関係があるのかもしれないな。」

テイラが試しに剣を引っ張ると、あつさり剣は抜けた。

「どうやら龍人のレイジンが抜いたことによつてこの剣の封印は解けたみたいだな。この剣については、いろいろと調べ甲斐があるな。また明日にするか。今日は隆司と戦つたし、たまには早めに寝るの

も遙く無いが。」

「やつた！早く寝ましょ、つテイラ様！」

「う、うわ、そつ懶くなつて」

テイラは一人にベッドに引つ張り込まれた。

テイラは一人に引つ付くなと言つていたからちゃんと一人は言つことを聞いてくれた。おかげでなんとか眠りに就くことができた。

五連休一回目

鳥のさえずりで目が覚めた。

「う・・・ん、結構眠つたな」

時計を見ると八時を回っていた。昨日の夜は十時前に寝たからかなり眠つたことになる。

十時間は眠つたな。なんか体があまりだるくない・・・たくさん眠つたからだろう。疲れも取れてるし、すぐに起きる気になれた。

ん? テイオとレイジン居ないな。もう先に起きたのだろうか?

リビングに行つたが一人の姿は見当たらなかつた。

何処へ行つたんだ? ん? これは・・・

テーブルの上に書き置きしきものがあつた。

それにはこう記されていた。

「ティラ様、私とレイジンはお買い物に出かけました。突然にすみません。昼頃には帰つて来るので心配なく。 テイオ・レイジンより」

買い物・・・か。何か欲しい物もあるのか? 何か不安だな。まあ、あんまり俺が引っ付いて回るのもあれだつ。あの二人にはあの二人なりの楽しみがあるのだろう。さて、朝食とつて武器の手入れをするか。

テイラは朝食を食べた後、武器の手入れのため、自分の部屋へ向かつた。

「この家に置いてある全部の武器を手入れしないとな」

テイラが引っ張り出した武器は、まずベッドの下にある龍の剣と、タンスの一番下に服で隠してあった一本の刀。鍵を掛けた戸棚にリボルヴァーブレイド「マグナムと長剣が合体した銃剣とも呼べる、斬撃と銃撃を行える優れた武器。

斬撃と同時に発砲すれば大きなダメージを「与える」とができる「何かで見たことあるような武器」とその弾薬2000発。弾薬は普通のマグナムと同じやつなので入手しやすい。日本では到底無理。とショットガン一丁とその弾薬500発。と天井裏に大剣一本。がある。これで全部だが、これはこちらの世界に来る時持つて来たものだ。こんなに持つてくる必要はなかつたのではないかとこの所最近思うようになった。

リボルヴァーブレイドやショットガンはまだ一発も打つていない。龍の剣も大剣もまだ使つてない。唯一刀だけが素振りとかに使われているぐらうである。

「ひとまず剣系の武器は磨いておけ」

ティラは机の引き出しから砥石をいくつか取り出すと、あぐらをかいてその上に大剣を置き、磨き始めた。

大剣は刀身が大きいからな。

磨ぐのは少々面倒だから先に終わらせる。ところで何故俺がショットガンなんか持っているかと言うと、ややこしくなるが、エクションボードと同じく未来に行つた時に旧型武器専門店に行くとあり、相当安い価格で売つてあつたのだ。リボルヴァーブレイドは向こうの世界の最先端技術で造られた武器だ。

それから全部の武器の手入れを終えると、武器を元の場所に戻した。ふと時計を見ると、そろそろ十時になりそつた。

なんか暇だな・・・ティオ達がいなくなると急に静かになつた。元々こうだつた。気にすることじやないだらう。そうだ、随分前から借りっぱなしの達弘のゲームでもするか。

ティラは一時間ゲームをして時間を潰した。

結構やつたな。なんか意外と面白かったな。達弘の気持ちが少しわかつた気がするな。

「もう十一時になるのか。ゲームとかをしてるとあつと書く間に過

ぎるんだな。時間といつものば

そろそろティオ達も帰つて来るだろ？。

ティラはティオ達の帰りを待つていたが、一時になつても一人がまだ帰つてこない。

‘お兄様――――――！’

龍姿のレイジンが猛スピードで飛んできた。

な、なんで龍になつてるんだ。

‘お兄様！大変です！’

レイジンが人に戻りながら言つた。相当な慌て様だ。

‘どうした？’

‘街に変な怪物が突然現れて人を襲つてます！’

「怪物だと？」

この世界に魔物なんているわけないじゃないか・・・動物園から逃げ出したトラかライオンかなんかだろ？

「で、どんなやつなんだ？その怪物みたいなヤツとは

「えーと、水色の大きなゼリーみたいなやつで、何本も触手が生えてて・・・」

「それ、思い切り魔物じゃないか！なぜこの世界に・・・まあそれは後だ！行くぞ」

レイジンと俺はそのゼリーの魔物の討伐に街へ向かった。

「うわー！なんだこいつー？た、助けてくれーー！」

街ではその魔物が体から何本も生えた触手を振り回し、無差別に人々や車などに攻撃していた

「なー？本当に魔物だ・・・ありえない」

レイジンの言うとおり魔物はゼリー状だ。それになんと言つても・・・でか過ぎる７メートルくらいある。普通は人の子供程の大きさの

はずだ。IJの魔物とは馴染み深い。戦闘的な意味で。RPGゲームで言つと、初めて出てくるスライム状の魔物だ。考えていても仕方ない

。倒す・・・

「わつにえばティオがいないぞ。ビニコつたんだ?」

「ティオならほり、あそこです」

レイジンの指差した先に魔物、スライムの触手につかまつているティオの姿があつた。どうやら氣絶しているようだ。

「私はなんとか逃げたんですけど、ティオが逃げ遅れてしまつて・・・

・

「ひとまずあこいつを静めるその隙にティオを助けるぞ」

ティラは持つてきておいた大剣を構えた。するところから『気づいた』スライムが体から一本の触手を生やし、振ってきた。

「危ない」

ティラはレイジンを抱えて飛び、触手をかわすと同時に斬激を『え

た。

切れた触手はしばらく地面でのたうち回つた後、溶けて液になり、その液は本体に向かつて流れて行つた。

「ややこしい相手になりそうだな。あいつは生半可な攻撃じや倒せ

ないな。普通の大きさだと簡単なんだが・・・むしろ自分から危害は加えないはずだ。普段はおとなしいからな」

「大きくなっちゃたから、凶暴のなつたんじやないんですか？」

「いつも考えるのが妥当だうつな。ソレでころ。俺はやつを倒す

「で、でも、危険じゃないですか！」

「あいつのことをよく知ってるのはきっと俺だけだと想つ。だから俺がやらないと」

「わ、わかりました・・・待ってます私。きっと戻つてきてくれないね！」

「わかつてゐ、安心しろ。死にはしない」

テイラはレイジンの頭をなでてやるとスライムの元へ向かった。

警察たちが必死にパトカーを盾にしてスライムに向かつて発砲していた。が、スライムに開いた穴はすぐに塞がつてしまい、全く聞いていない様子だった。

テイラは進み出ようとしながら警察官に引き止められた。

「さ、君！こは危険だぞ！早く逃げるんだーん？何だその大きな刃物は・・・銃刀法違反だぞ？」

「そんなこと言つている場合じやありません。それに今の勢力では全く歯が立たないでしょ。多分、あいつはマシンガンもミサイルもあまり聞かないでしょ。俺がこの剣で真つ二つに切り裂いて見せます！」

「んん・・・そうか、真つ二つにか・・・」

よし、今だ。

テイラは隙を見て戦場へ入りこんだ

「ああ、さ、君！待つんだ！」

テイラ聞かずに入り込んだ。他の警官達がテイラに気がついたのか、発砲がやむのがわかった。そして周りがざわめいた。

テイラに気がついた巨大スライムは何本もの触手を一斉に飛ばしてきた。

第一十一話 五連休二日目 突如現れた巨大なザコ敵2（前書き）

いやはや、受験終了しました。結果は見事合格でした。これで安心して小説書けます。いつテイラを青の世界に戻そうか迷っています。そう遠くはないので、少し話がまとまつたら戻すつもりです。では二十一話どうぞ。

第一十一話 五連休二日目 突如現れた巨大なザコ敵2

テイラに迫つて来る何本もの触手。

テイラは飛んでかわした。触手はテイラの後ろにあつた車にあたり、車は爆発した。テイラは少し低めのビルの上に降りた。人間では考えられない程の跳躍力だ。

更に触手は周りから覆うようにして迫つて来た。
逃げ場がない。

テイラは大剣を横に振つた。

振つた軌跡が赤い燃え盛る炎となり、飛んでいった。それは触手に当たると、斬ると同時に燃やした。ジュワリと言う蒸発したような音と共にテイラの周りにドサドサと何本ものちぎれた触手が落ちてきた。それはまたも液体になり、本体へ戻ろうとする。テイラは見逃しはしなかつた。大剣に炎をともし、液体に振り付けて蒸発させる。

すると本体がピクリと動き、何本か触手を体にしました。

ん？ 静まつたか・・・？

テイラがそう思った瞬間本体から突然一本の触手が飛び出し、テイラに向かってきた。

テイラは切り落とそうと大剣を振りかぶった。

ガキン！

金属同士が激しくぶつかる音が響いた。

なっ！

触手は切れてしまはず、テイラの大剣と対等にぶつかっていた。

何本かの触手をまとめて丈夫なのを生み出したのか。刃の様な形をしているな。対斬激武器と言う訳か。

触手はそうだと言わんばかりに触手を振り払い、大剣もろともテイラを吹き飛ばした。

ドカン！

「つー」

テイラは後ろにあつたさつきいたビルより高めのビルの壁に叩きつけられた。体がめり込んだ。が、体は重力に負け、下に落ちてしま

う。下にいる人達のざわめき声や悲鳴が聞こえる。真逆さまだった体を立て直して地面に着地した。すると驚いたような声が周囲から上がつた。

「君、大丈夫か！？」

すぐ近くにいた若い警官が声を掛けて來た

「はい、大丈夫です」

俺にとつては全然軽い傷だ。壁に叩きつけられたくらいなんともない。

「足、折れてないのか」

「はい」

警官の人は驚いたような顔をしたが、もとの表情に戻るとまた話掛けってきた。

「そ、そ、うか。それよりどうにかなりそ、うか？あいつ」

そう言つて巨大スライムを指差す。

「大丈夫。必ず倒します。」

その時、爆音が響いた。空には何機もの戦闘機や戦闘ヘリがスライムに向かつて飛んで行く。道路には沢山の戦車で埋め尽された。

「おお、これはこれは。自衛隊のおでましか？」

周りから歓声や拍手が沸き上がった。

そして一斉射撃が始まった。空からまばゆいサイルの雨、地上からは砲弾の嵐。凄まじい爆発音が街中に響き渡った。

段々と煙が晴れていく。

「やったか！？」

「なつ！ テイオ！」

テイラはただじっと見つめていた。

まだ煙はかなり立ち込めている。突然一本の触手が煙の中から飛び出し、空の戦闘機や戦闘ヘリを叩き飛ばしたり、落とした。周りから悲鳴が上がる。

「なにー? あんなにやつたのこまだいきてーいるのか?」

いや、あいつの場合特別だ。他の魔物なら跡形もない。もちろん。強力なやつでもだ。

「俺が行く」

やつこひとテイラは警官の呼び止めに振り向きもせず走った。

ティオ。無事でいてくれ。

ティラは煙の中に飛込んだ。そこには無傷のスライムがいた。

全く効いてない・・・ん? これは・・・

よく見るとスライムの少し前に半透明の膜のようなものがスライムの体を覆つようにして貼つてあった。

バリアーか。こんな上級技を使いこなすとは。なかなかだな。だが、俺には通用しないな

ティラは一閃すると、張られていたバリアーはいとも簡単に砕けた。そして一気に距離を積める。その動きがあまりにも速かつたのか、スライムは少し出遅れた。迎撃とうとしたが、既にティラはティオを捕まえていた触手を切り落として救出していた。

「これで決める」

ティラは大剣を真っ直ぐに構える。大剣を赤い炎が包んだ。それと同時に大剣から眩い光が放たれた。ティラはティオを空高く放り投げた。そしてスライムにそのまま突っ込み切り上げた。スライムは空高く跳ね上げられた。ティラも追う様にして飛んだ。そしてスライムに炎をともした大剣が振るわれた。

「斬天激！」

連続してスライムに斬激が与えられる。以前ティオ達にやつた時と全然違っていた。一撃一撃に凄まじい轟音が鳴り響き、切つているのではなく、叩き切つていいようだった。みるみるスライムの体が崩れていき、少しずつ小さくなつていった。

計17発の斬激を与えた後、高速で逆宙返りしながら2発斬激を与え、もう一度回つて大剣を縦切りの構えに持つて行く。そして最後の一撃に力を溜める。大剣が眩く光り、収まる。そして炎の一撃が与えられた。

ドガアアアン！！

凄まじい爆発音と共にスライムは思いきり地面に叩きつけられた。

道路には巨大なクレーターが出来ていた。ティラは地面に着地すると同時に大剣を背中にかけ、丁度良く降つて来たティオを受け止めた

「田立ち過ぎた・・・一田引くか」

ティラはエクションボードを呼び出すと、人目に着かない様に煙の中を飛び、レイジンの待つている所へと急いだ。

「あ！お兄様っ！ティオも無事だつたんですね！」

「ああ、今は急がなれば・・・乗れ、行くぞ」

「はい！」

そして俺達は家に戻った。しばらくして警察が来て署まで来て欲しいと言われ、逆らう訳には行かないから行くことにした。

回想

「それで、テイラ君だつたかな？今回の騒動についてだが・・・

「はい」

俺は一人の刑事の人と机を挟んで向かい合つて座っていた。

「あのようなものが今まで出て来たことは無かつた。つまり、未確認生命体だ。しかも狂暴だ。君はそんなやつを倒した。いとも簡単そうにな。ひょっとして君は何か関係があるんじゃないかな？」

有るにはあるが・・・言つべきか？

少し迷つたが言つことにした。

「信じられないかもしませんが、やつは見れば分かるようこの世界のものではありません」

「ふむ、だが見てしまったからには、そう信じるしかあるまい」

「信じる、とは言いません。ただ、今はこれだけしか・・・」

「ああ、無理に言つ」とはない。ありがとう」

「刑事の人は優しく微笑んでくれた。安心した。いい人だ。

「それでその時君は大きな刃物を使っていたな?」

「大剣ですか」

「まあ、その大剣とやらの所持には特殊な免許がいるのだが・・・

「すみません。免許はありません。銃刀法違犯ですよね・・・」

「ああ、いやその事なんだが、君は特別その法律には掛らない事になつたんだよ。審議でね。全議員が認めてね、即決だつたよ」

「それでは・・・」

「ああ。君には全く積みはない。ただし、その武器で脅迫等はまた別の罪に問われるからな。これはまたあのよつなものが現れたときのためなのだからな」

「はい。わかつています」

「よし、壇つゝ」とはそれだけだ。わあ、家に送りつ

「あつがどつゝ」とまます

「こやこや、呼び出したのはひかりの方だ。むしろひづちが礼を言つべきだ。ありがどつゝ」

「いえ、当然の事をしたままでです」

回想終了

と、こんな流れで俺は家に帰してもらつた。その後ティオの意識が戻り、特に怪我をした様子も無く、安心した。早く戻らなければならない。青の世界へ。

慌ただしい日が幕を閉じた・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8177d/>

ドラゴンレジェンド

2010年10月16日14時40分発行